

「エトノス」に基づくアカイア連邦の公職制度と統合政策

——古代ギリシアの共同体を捉える新たな視角——

岸 本 廣 大

【要約】 古代ギリシアにおいて複数の共同体から構成された「連邦」は、ポリスの相対化を試みる近年の研究動向の中で注目されるが、依然ポリスのみを単位とした見方に規定されている部分がある。しかし、ヘレニズム時代のアカイア連邦の公職制度、特にノモグラフォイ職を加盟ポリスに割り当てる原則の問題は、そのような見方からは説明できない。その問題に対して、本稿は地域的アイデンティティに基づいた共同体「エトノス」という単位が有効であると考察した。そして、「エトノス」という単位による分析からは、アカイア連邦が複数の「エトノス」から成り、公職制度において「エトノス」に配慮していたことが示された。さらに、碑文における「アカイア人のコイノン」という文言の用例と連邦の議会制度改革の経緯から、連邦の「エトノス」に対する統合政策を考察し、アカイア連邦が「エトノスの連邦」を志向していたことを明らかにした。

史料 九六巻二号 二〇一三年三月

はじめに

ポリスが古代ギリシア世界の重要な構成要素であったことは、研究の進展した今日でも疑いない。ゆえに、蓄積の厚いこれまでの研究も、多くはポリスに焦点を当ててきた。ポリスと国民国家を重ねる近代的な歴史観と史料の制約に由来して、とりわけ研究の中心となったのは、民主政ポリスとして繁栄を誇ったアテナイであった。しかし、ギリシア史研究においてその歴史観が揺らいだ一九九〇年代から、ポリスという視角を相対化しようとする試みが活発になってきた。例え

ば、コペンハーゲン・ポリス・センターの研究プロジェクトは、古典期の人々の目線からポリスの再定義を試み、BrockとHodkinsonが編んだ論文集は、アテナイ、ひいてはポリスを超えた新しいギリシア史を模索しようとしている。^② 其中で、ポリスと異なる視角として連邦にも注意が向けられた。古代ギリシアの連邦は、複数のポリスが結びついた組織と一般的に理解されている。^④ そして、主として外交のために加盟ポリスから独立した中央機関を有し、同様の公職者がその活動を担っている点から、連邦への着目は確かにポリスという視角の相対化を試みるものであった。しかし、それらの研究は連邦の構成単位としては依然ポリスを重視していた。そのため、代表的なアカイア連邦を対象とした先行研究を整理すると、ポリスという単位からは説明のつかない現象が析出される。本稿はこの問題に対し、ポリスとは異なる新しい単位の可能性を検討していく。最終的には、ポリスを相対化し、ポリスを含めた古代ギリシアの共同体を包括的に捉え直す新たな視角を提供することがきるだろう。

具体的な議論の前に、本稿で用いる連邦という用語について簡単に述べる。古代ギリシアにおいて、ボイオティアやアイトリアに現代の連邦と類似する共同体が存在したことはよく知られている。しかし、そのような共同体は「league」や「confederation」「federation」と表われ、日本語においても「連邦」だけでなく、「同盟」や「連盟」と訳されるなど、明確な用語の使い分けはなされていない。そもそも古典ギリシア語の語彙に、そうした共同体を直接的に指すものではなく、「エトノス」や「コイノン」、「シュンポリティア」といった語が転用されていた。本稿では、連邦という用語の正否については論じないが、複数の共同体から成り、かつ加盟共同体から独立した中央機関を組織する共同体を連邦と表すこととする。^⑤

※ 史料や欧語文献の略称は、原則S.Hornblower & A.Spurforth (eds.) [1996] *The Oxford Classical Dictionary* 3rd ed., Oxford (以下OCD³)に従う。そこに記載のないものに限り、ウェブサイト上の

Lamiae philologique (<http://www.lamiae-philologique.com/>) の略記法に従う。また注で複数回言及される文献は、「著者名」[出版年]（最初に言及した章および注番号）という形式で示す。

① コペンハーゲン・ポリス・センター (The Copenhagen Polis

Centre、以下CPC)の研究成果は、多くの報告集にまとめられているが、ここではその集大成としてのM.H.Hansen & T.H.Nielsen

(eds.) [2004] *An Inventory of Archaic and Classical Polis*, Oxford を挙げるに留める。長谷川による書評(長谷川岳男 [2006]『西洋古

典学研究』五四、一三八—一四一頁)も参照。なお、CPCの研究手法については、周藤芳幸 [2010]『ロドス島ヴルリア遺跡と前古典期

の東地中海世界』桜井万里子・師尾晶子編『古代地中海世界のダイナミズム——空間・ネットワーク・文化の交錯』山川出版社、一四—三

一頁で、問題点も指摘されている。

② R.Brock & S.Hodkinson [2000] *Alternatives to Athens. Varieties of Political Organization and Community in Ancient Greece*, Oxford.

③ K.Buraselis [1994] *Unity and Community in Antiquity*, Athens; L.A. Foresti et al. (eds.) [1994] *Federazioni e federalismo nell'Europa antica*, Milan; K.Buraselis & K.Zournoudakis (eds.) [2003] *The Idea of European Community in History* vol.2, Athens.

④ J.A.Larsen & P.J.Rhodes, *OCD*³ s.v. "federal states".

⑤ 古代ギリシアにおける連邦の研究史については、拙稿 [2009]「連邦から見たポリスのアウトノミア——ポイオティア連邦の分析を通して——」『西洋古代史研究』九、一—三三頁、特に三—四頁を参照。

連邦を表す三つのギリシア語については、A.Giovannini [1971] *Untersuchungen über die Natur und die Anfänge der bundesstaatlichen Sympolitieia in Griechenland*, Göttingen 及び F.W.Walbank

[1965] 原著 1976/7] *Were There Greek Federal States?* in: *Selected Papers. Studies in Greek and Roman History and Historiography*, pp.20-37 (= SCI 3, pp.27-51) を参照。なお、古代ギリシア人が連邦

なる概念を有していたのかという問題については未だ議論があるが、詳細は G.A.Lehmann [2001] *Ansätze zu einer Theorie des griechischen Bundesstaates bei Aristoteles und Polybios*, Göttingen を参照。

本稿は、古代ギリシアにおける特定の共同体を分析・理解するために有効な概念として、連邦を用いる。

第一章 先行研究と問題の所在——連邦のポリス的理解の限界——

第一節 アカイア連邦の公職制度

本稿が対象とするアカイア連邦は、ペロポネソス半島北部のアカイア地方に位置した複数の共同体により、前五世紀末までに成立した。前四世紀末頃に一度解体されたものの、前二八一〇年に再建されると大きく発展し、前一九一年には半島全体をその影響下に置く。その後、前一四六年にローマに敗北するまで、ギリシア本土においてマケドニアに次ぐ

大勢力であり続けた。このアカイア連邦は一九世紀から注目を浴び、初期の研究はアカイア連邦を一九世紀当時の連邦に連なる祖形として肯定的に評価した。^①二〇世紀に入ってからには、その政治史や制度史が注目され、より綿密な研究が行われるようになり、連邦の対外政策や議会の詳細な研究が特に盛んになった。^②また、ローマ史研究の側から、東地中海へのローマの拡大と関連したアカイア連邦の役割を論ずる研究が現れた。^③これらの諸研究は、それまで肯定的に評価されたアカイアの連邦組織を過大評価せず、むしろ加盟ポリスの独自性を強調する傾向を有した。そして二〇世紀末からは、連邦の成立前や解体後を含めた、前古典期からローマ時代に渡る広い時代を対象とした考古学的な調査が盛んである。^④

このように、一九世紀からの研究蓄積が厚いアカイア連邦であるが、その公職制度については不明な点が多い。前二五七／六年に制度改革がなされたことは知られているが、^⑤それ以前の制度については書記一人とストラテゴス二人を輪番制で担当していたということ以外はほとんどわかっておらず、公職者の個人名も全く知られていない。必然的に、公職制度の研究は制度改革後が対象となる。

改革後は、選出されるストラテゴス一人に連邦の全権が委任されることになった。将軍を意味するその名の通り、その職務は戦時の軍隊指揮や平時の軍事訓練が主だが、それゆえ連邦全体を統率するなど、絶大な影響力をもつ指導者であった。任期一年のこの役職は、権力の集中を防ぐためか、連続して就任することは禁じられていたものの、その就任回数に制限はなかった。^⑥

それ以外の公職者については史料にあまり見られず、職務内容や構成はほとんど不明である。ヒュポストラテゴスはストラテゴスの補佐と考えられているが、構成人数や具体的な権限については知られていない。^⑦ヒッパルコスとナウアルコスは、語義通りそれぞれ騎兵と艦船を指揮する役職とされる。役職名は明示されないが、実際の戦闘で部隊指揮を務めた者も公職者の可能性がある。軍隊に関する役職以外では、一〇名から成るダミルゴイが知られている。^⑧この役職は、前二八一／〇年の連邦再建以前にも見られた。史料では先議を行うような描写もあるが、^⑨実際の政務に携わる役職だったと

考えられている。また、各地に派遣された使節は、任期や職務内容が様々だが、議会で選出されることが多く、公職者の側面も強い。

後述するノモグラフォイを含め、以上が現段階で知られているアカイア連邦の役職の全てである。これらのうち、先行研究ではストラテゴス^⑪とノモグラフォイに関心が集まり、それ以外の役職や公職制度全体を考察する研究は少ない。その中で、Ozbeの研究は公職者全体を詳細に扱うほぼ唯一の研究として、アカイア連邦の公職制度研究の一つの到達点をなしている。彼は、アカイア連邦とアイトリア連邦の公職者の出身ポリスを分析し、その多様さの程度から両者の政体を論ずる^⑫。だが、アカイア連邦に対する分析においては、公職者の出身ポリスの構成について時代的変遷を考慮しておらず、さらに、ノモグラフォイという役職を直接は議論していない。しかし、次節で示すように、ノモグラフォイはアカイア連邦の公職制度を分析するうえで欠かせない役職である。さらに、Ozbeの論文が発表された当時は確認されていなかったノモグラフォイの碑文が、近年の考古学的成果によって新しく発見されたため、その新史料の分析も組み入れる必要がある。そこで、次節ではノモグラフォイに焦点を当て、本稿が扱う問題をより明確にしていく。

第二節 ノモグラフォイをめぐる問題

碑文から知られるノモグラフォイは、役職名の通り法律の記録に関わっていたと推測されるが、職務内容の詳細は不明である。ノモグラフォイ全員の名と出身ポリスが刻まれたエピダウロス出土の碑文^⑬（以下、エピダウロス碑文）によれば、一七ポリスから一〇三人が選出、全二四人で構成されている（表一）。ポリスごとにその内訳を見ると、アルゴスとメガレーポリスが三人ずつ、アイギオンとデュメ、シキュオンが二人ずつ、それ以外の諸ポリスが一人ずつである。構成人数と出身ポリスの多さから、ノモグラフォイについての先行研究は、その役職を各ポリスへ割り当てる原則について、長らく議論してきた。

表一：ノモグラフォイの各ポリスへの割り当て人数

表一—：エビダウロス碑文

ポリス名	人
アルゴス	3
メガレーポリス	3
アイギオン	2
デュメ	2
シキュオン	2
アスケイオン	1
ブーラ	1
エビダウロス	1
ヘルミオネ	1
クレオナイ	1
ルーソイ	1
パトゥライ	1
ベッレネ	1
ファライ	1
フェネオス	1
フリウス	1
トゥリタイア	1
合計	24

表一—二：アイギオン碑文

ポリス名	人
スバルタ	3
メガレーポリス	2
メッセネ	2
アンティゴネイア	1
アシネ	1
アスケイオン	1
ヘライア	1
カフュアイ	1
クレイトル	1
コロネ	1
キュパリシア	1
ルーソイ	1
オルコメノス	1
パツランティウム	1
テゲア	1
ヒュバネ	1
フィガレイア	1
合計	21

前半の欠落部は19-24人分？
Cf. Rizakis [2008]（第一章注
④） N.116

アカイア連邦についての先駆的研究者であるAymardは、この問題を消極的に解釈し、連邦に属する人々がそれらに注意を向けなかったため、原則のようなものは存在しなかったかもしれないと結論付けた。連邦研究の基礎を築いたLarsenも、これを受け入れている^⑮。しかし、Swobodaが主張し、後にLehmannやGschntzerなどが展開した、各ポリスの人口や重要性に応じて役職を割り当てる比例の原則があったとする説が、その後は有力となった。ただし、その説においても、コリントスやオルコメノスなどの比較的大きいポリスの出身者がいないという問題が残り、様々な解釈が行われてきた。例えば、LehmannやGschntzerはボ

イオテイア連邦の例から、小さな複数のポリスがグループを作り、輪番制で一人の公職者を出していたと考えている^⑰。他方Corstenは、後述するようにアカイア連邦が地区に分割されていたと推定して、それを基準に役職が割り当てられたとする^⑱。ただ、利用できる史料がエビダウロス碑文一点のみであり、先行研究の議論はどれも決定的ではなかった。

一九九九年、欠落があるものの、前一九二〇—一年以降と推定される碑文がアイギオンで新たに発見された^⑲（以下、アイギオン碑文）。その碑文からは、一七ポリス出身の二人がノモグラフォイの一部を構成していたことが読み取れる（表一—二）。

ポリスごとの内訳は、スパルタが三人、メガレーポリスとメッセネが二人ずつ、それ以外の諸ポリスが一人ずつである。この碑文を紹介した *Herodotus* は、ノモグラフォイが比例的に選出され、人数はエビダウロス碑文同様一―三人であること、小ポリスはグループによる輪番制だったことが確かめられたとする。そして、スパルタなどの加盟による連邦の拡大が、ノモグラフォイの構成を変化させたとも主張した。以上が現在の通説となっているが、特に *Costen* や *Risakis* の指摘からは、この割り当ての原則をめぐる問題が、ポリスを唯一の割り当ての単位としては説明できないことを強く示す。ここに連邦研究が当然の前提としていたポリスという視角の限界が露呈するのである。

第三節 *Costen* 説——シュンテレイア——の検討

ノモグラフォイの割り当ての原則は、ポリス以外にどのような単位を用いれば、分析することができるのだろうか。この問題について、近年積極的に取り組んだのが *Costen* である。彼は、兵員や資金の調達を目的とした地区に分かれていたことが、古代ギリシアの連邦に共通する特徴と考えている。そして、アカイア連邦においてはポリュビオスの記述から「負担の共有」を意味するシュンテレイアという地区が存在することを指摘し、そのシュンテレイアの軍隊を指揮するのがヒュポストラテゴスであると解釈した。そして、先に挙げたエビダウロス碑文から、当時のアカイア連邦にはシュンテレイアが五つ存在し、それぞれ五人ずつノモグラフォイが割り当てられたと推測している^②。この説を、アイギオン碑文を検討した *Risakis* も有力視している。

だが、*Costen* の解釈をそのまま受け入れることは難しい。まず、シュンテレイアをアカイア連邦の地区とみなす根拠は、「パトウライのシュンテレイアの (της ουντελειας της Παρρυκίης)」ヒュポストラテゴスで、ファイ出身のリュコスに關するポリュビオスの記述のみである^①。このシュンテレイアを地区と解釈するのが、確かに主流であるが、そもそもこの部分については異読もある。さらに、「パトウライのシュンテレイア」という地区の存在を認めたとしても、それを構成

するポリスが、パトゥライ、デュメ、ファライ、トゥリタイアの四ポリスとする Corsten の主張には疑問が残る。というのも、彼が根拠とする箇所^{②③}に、これら四ポリスの全てが常に挙げられているわけではないからである。また、Corsten が挙げた事例において、シュンテレイアは軍事的な機能しか有していない。他方で、同盟市戦争の最中にデュメ、ファライ、トゥリタイアの三ポリスがアカイア連邦への納付金支払いを停止した事例に、パトゥライが言及されておらず、他の三ポリスに同調したのか、あるいはその納付金を肩代わりしたのか不明である。ポリュビオスの記述からは、この納付金の支払いが四ポリスの属するとされる「パトゥライのシュンテレイア」を介していたとは読み取れない。連邦への納付金支払いに関する財政的な単位として、シュンテレイアは機能していないと考えるべきだろう。そもそも「パトゥライのシュンテレイア」以外にシュンテレイアが存在したのかという問題もある。先に示したように、史料にそのような記録はなく、連邦の再建を主導した四ポリスのみが特別なまとまりを形成していたとも考えられる^{②④}。もし、シュンテレイアが「パトゥライのシュンテレイア」のみであったならば、連邦全体に割り当てられる役職の単位とはなりえない。以上から、本稿は Corsten の主張するシュンテレイアがアカイア連邦を構成する地区であることには、直ちに賛同できない。もしシュンテレイアなる地区が存在したとしても、その機能は限られており、財政や公職者の割り当てがこのシュンテレイアに基づいていたと考えるのは難しいだろう。

第四節 役職全体の分析

では、ポリスやシュンテレイア以外に、どのような単位でノモグラフォイの割り当てを捉えるべきなのか。本稿は、アカイア連邦の公職者全体を対象として分析することで、この問題に取り組む。というのも、前章で主に検討した O'Brien や Corsten の研究は、それぞれ前者はノモグラフォイ以外の役職（以下、便宜的に役職一般とする）、後者はノモグラフォイのどちらか一方しか扱っていないからである。しかし、ノモグラフォイを割り当てる原則が存在するならば、それはノモ

グラフィオイだけではなく、役職一般にも適用された可能性がある。もちろん、役職一般とノモグラフィオイでは、その重要性や構成人数が異なっており、それゆえに選出方法も同じであったとは限らない。そのため、まず本節で役職一般とノモグラフィオイの出身ポリスの傾向を分析し、そこに共通した特徴が見いだせるのかを明らかにする。

具体的な分析の前に、分析の方法と対象を示す。本稿は、分析にあたってアカイア連邦の公職者の役職・出身ポリス・就任頻度に着目し、あるポリスからどのような公職者がどれだけ輩出したのかを調査した(表二)^②。役職一般の事例は、ほとんどストラテゴスであるが、全体の傾向を探るためにも、第一節で挙げたヒュポストラテゴス、ヒツパルコス、ナウアルコス、ダミウルゴイといった事例数の少ない役職も分析対象とした。それ以外に、役職名はないものの、連邦の軍隊指揮者や連邦が派遣した使節も、その性格上、連邦の公職者として扱い、補助的な事例として分析に組み入れる。頻度については、同一人物による複数回の就任も数え入れた「のべ回数」を示した。

では、表二を参考にしながら、まず役職一般の出身ポリスを分析していこう。○^③も指摘するように、特定のポリスへ集中する傾向が見られ、メガレーポリスとシキュオンは特に顕著である。最高役職であるストラテゴスの出身は九ポリスに限られ、やはりメガレーポリスとシキュオンが突出している。ストラテゴスは毎年一人しか選出されないため、出身ポリスよりも個人の資質がこの偏りに大きく影響したと考えられる。^④だが、九ポリスのうち五つがアカイア連邦初期の加盟ポリスというのは注目に値する。初期の加盟ポリスの中では公職者の出身ポリスが比較的分散しているのに対し、後の加盟ポリスの中では独占といえる状況が見られる傾向は、ストラテゴス以外の役職でも同様である。このことは、初期の連邦の加盟ポリスと、再建後に加盟したポリスとの間で、役職の割り当ての仕方に何らかの違いがあったことを示唆する。

他方でノモグラフィオイは、役職一般と異なり多くのポリスに割り当てられ、特定のポリスへの極端な集中は見られない。しかし、複数のノモグラフィオイが割り当てられているポリスは、エビダウロス碑文で一七ポリスのうち五つ、アイギオン碑文で一七ポリスのうち三つと、少なからず偏りが見られる。しかも、それらのポリスのうち、デュメ、メガレーポリス、

表二：アカイア連邦の公職者の出身ボリス（のべ回数）

	St.	Hy. St.	Nau.	Hipp.	軍	Dami.	使節	Nomo.	合計
アイゲイラ	4						3		7
アイギオン					1		4	2	7
アスケイオン								2	2
ブーラ								1	1
デュメ	3	1			4		1	2	11
カリュネイア	1		1						2
レオンティオン	1						2		3
バトゥライ			1					1	2
ベツレネ					1	1		1	3
トゥリタイア								1	1
ファライ	1	1						1	3
●アカイア地域	10	2	2	0	6	1	10	11	40
ヘライア								1	1
カフュアイ								1	1
クレイトル								1	1
マンティネイア								1	1
メガレーボリス	17			2	1		10	5	35
オルコメノス								1	1
パツランティウム								1	1
ルーソイ								2	2
テゲア								1	1
フェネオス								1	1
フィガレイア								1	1
ヒュパネ（トゥリフュリア）								1	1
●アルカディア地域	17	0	0	2	1	0	10	17	49
●シキュオン（＝地峡地域）	7				1		6	2	16
アルゴス	1						1	3	5
エビダウロス								1	1
ヘルミオネ								1	1
クレオナイ								1	1
フリウス								1	1
●アルゴリス地域	1	0	0	0	1	0	1	7	9
●スパルタ（＝ラコニケ地域）	1	0	0	0	0	0	0	3	4
アシネ								1	1
コロネ								1	1
キュバレシア								1	1
メッセネ								2	2
●メッセニア地域	0	0	0	0	0	0	0	5	5
●エリス（＝エリス地域）	0	0	0	0	0	0	1	0	1
不明	16	1	0	1	2	0	6	0	26
合計	45	3	2	3	10	1	27	45	150

凡例

St. ストラテゴス

軍 軍隊指揮者

Hy.St. ヒュボストラテゴス

Dami. ダミウルゴイ

Nau. ナウアルコス

使節 使節

Hipp. ヒッパルコス

Nomo. ノモグラフォイ

●は各地域の合計を示す。地域区分は Hansen & Nielsen (ed.) [2004] (「はじめに」注①) に拠った。

ただし、トゥリフュリアに属するヒュパネはアルカディアに含む。第三章注①を参照。

※ノモグラフォイ以外の依拠史料は表三を参照

表三：公職者の出身ポリス・依拠史料一覧（丸印いの数字はストラテゴスの就任回数／就任年はすべて紀元前／※は先行研究による推定のため、表二には反映していない）

就任年	名前	役職名	出身ポリス	依拠史料	備考
257/6	マールコス	ストラテゴス	カリュネアイア	Polyb. 2. 43. 2	
245/4	マールコス①	ストラテゴス	シキエオン	Puit. <i>Vit. Arat.</i> 16. 1.	
243/2	マールコス②	ストラテゴス	シキエオン	Polyb. 2. 43. 4; Puit. <i>Vit. Arat.</i> 16. 2.	
※ 241/0	マールコス③	ストラテゴス	シキエオン	Walbank [1933] (第一章注③) pp.174f.	
240/39	アイギテレウス	ストラテゴス	? <i>Syll.</i> N. 471.		
※ 239/8	マールコス④	ストラテゴス	シキエオン	Walbank [1933] (第一章注④) pp.174f.	
※ 237/6	マールコス⑤	ストラテゴス	シキエオン	Walbank [1933] (第一章注⑤) pp.174f.	
236/5	アイギテレス	ストラテゴス	? Polybios 2. 36.		Cf. Walbank [1933] (第一章注④) pp.174f.
※ 235/4	マールコス⑥	ストラテゴス	シキエオン	Walbank [1933] (第一章注⑥) pp.174f.	
234/3	リュエテイトリス ①	ストラテゴス	マザレーポリス	Puit. <i>Vit. Arat.</i> 30. 4.	
※ 233/2	マールコス⑦	ストラテゴス	シキエオン	Walbank [1933] (第一章注⑦) pp.174f.	
232/1	リュエテイトリス 1 ②	ストラテゴス	マザレーポリス	Puit. <i>Vit. Arat.</i> 30. 4.	
※ 231/0	マールコス⑧	ストラテゴス	シキエオン	Walbank [1933] (第一章注⑧) pp.174f.	
230/29	リュエテイトリス 1 ③	ストラテゴス	マザレーポリス	Puit. <i>Vit. Arat.</i> 30. 4.	
※ 229/8	マールコス⑨	ストラテゴス	シキエオン	Walbank [1933] (第一章注⑨) pp.174f.	
マールコス	マールコス	ストラテゴス	カリュネアイア	Polyb. 2. 10. 5.	Cf. Walbank [1957] (第一章注⑤) pp.160f
228/7	マールコス	ストラテゴス	マザレーポリス	Puit. <i>Vit. Arat.</i> 35. 3.	
227/6	マールコス⑩	ストラテゴス	シキエオン	Puit. <i>Vit. Arat.</i> 35. 5.	マールコスによれば12回目
227	ニコマケス	マケドニアへの使節	マザレーポリス	Polyb. 2. 48. 4-8. 50. 3, 5	使節の要請
マールコス	Κεκριδης	マケドニアへの使節	シキエオン	Polyb. 2. 51. 5.	マールコスの息子 目的は上に同じ
c.226-4	マールコス	ストラテゴス	? Puit. <i>Vit. Arat.</i> 38.		
226/5	リュエテイトリス	ストラテゴス	? Puit. <i>Vit. Cicom.</i> 14. 1.		
225/4	マールコス①	ストラテゴス	シキエオン	Walbank [1933] (第一章注①) pp.174f.	
※ 224/3	マールコス②	ストラテゴス	? Polyb. 2. 53. 2		
223/2	リュエテイトリス②	ストラテゴス	マザレーポリス	Polyb. 2. 65. 3.	セラシアの戦い
222	Κεκριδης	ストラテゴス	シキエオン	Walbank [1933] (第一章注②) pp.174f.	
※ 222/1	マールコス③	ストラテゴス	? Puit. <i>Vit. Arat.</i> 47. 2; Polyb. 4. 6. 4.		
221/0	マールコス④	ストラテゴス	シキエオン	Puit. <i>Vit. Arat.</i> 47. 2; Polyb. 4. 6. 7.	
220/19	マールコス⑤	ストラテゴス	シキエオン	Polyb. 4. 37. 1.	
219/8	ミッコス	ストラテゴス	シキエオン	Polyb. 4. 59. 2.	
マールコス	Πιδοθαρος	マケドニアのストラテゴス	シキエオン	Polyb. 4. 72. 9.	
ピュラテス	Πυθαγας	マケドニアの統治	ベッセルネ	Polyb. 4. 72. 9.	
218/7	エペテリス	ストラテゴス	マザレー	Polyb. 4. 82. 8; Puit. <i>Vit. Arat.</i> 48.	
218	ポリュメテリス	精銳部隊の将	アイギオン	Polyb. 5. 17. 4.	同盟市戦争で、エリス軍と衝突
マザレーポリス	Αγροτολικ	精銳部隊の将	デュメ	Polyb. 5. 17. 4.	同上
マザレーポリス	Διοκτες	精銳部隊の将	デュメ	Polyb. 5. 17. 4.	同上

217/6	アリス⑩	Agartos	ストラテゴス	シキオオン	Polyb. 5. 30. 7.	バクトライの可能性もあり Cf. Walbank [1957] (第一章注⑤) pp. 624f
	リュコス	Alykos	ヒュギストラテゴス	アライ	Polyb. 5. 94. 1.	
	デモトコス	Demotokos	ヒツバルコス	?	Polyb. 5. 95. 7.	
216/5	アエケセノス④	Tyudēnos	ストラテゴス	?	Polyb. 5. 106. 1.	
213/4	アリス⑨	Agartos	ストラテゴス	シキオオン	Walbank [1933] (第一章注⑩) pp. 174f	
213/2	アリス⑧	Agartos	ストラテゴス	シキオオン	Polyb. 8. 12. 2; Plut. <i>Vit. Arist.</i> 53. 1.	アルタルコスによれば17回目
211/0	エウリュエオン	Eurykleon	ストラテゴス	?	Polyb. 10. 21. 1.	
210/9	キエウリテス①	Cyclidas	ストラテゴス	?	Livy. 27. 31. 10.	
	アロボイメン	Phlorotimny	ヒツバルコス	メガレーポリス	Polyb. 10. 22. 6; Plut. <i>Vit. Phil.</i> 7. 3.	
209/8	ニキテス	Nicias	ストラテゴス	?	Livy. 28. 8. 10.	
208/7	アロボイメン①	Phlorotimny	ストラテゴス	メガレーポリス	Polyb. 11. 9. 1-10. 6; Plut. <i>Vit. Phil.</i> 8. 2.	
	アリスタイノス	Agortanos	右翼の騎兵指揮官 (「ペンテイネイテ」の戦い)	デュメ	Polyb. 11. 11. 7.	原史料には Agortiveros とあり Cf. F. W. Walbank [1967] <i>Commentary on Polybius</i> vol. II, Oxford, p. 287; id. [1979] <i>Commentary on Polybius</i> vol. III, Oxford, p. 187.
	アウシダモス I	Awatidamos	軍指揮官	?	Polyb. 11. 18. 1.	ペンテイネイテの戦い
206/5	アロボイメン②	Phlorotimny	ストラテゴス	メガレーポリス	Plut. <i>Vit. Phil.</i> 11. 1.	
203/2	アロボイメン③	Phlorotimny	ストラテゴス	メガレーポリス	Errington [1969] (第一章注⑥) p. 250.	204/3 年の可能性もあり
202/1	リュシッポス	Lyshippus	ストラテゴス	?	Plut. <i>Vit. Phil.</i> 12. 4.	
201/0	アロボイメン④	Phlorotimny	ストラテゴス	メガレーポリス	Polyb. 16. 36f.	
200/199	キエウリテス②	Cyclidas	ストラテゴス	?	Livy. 31. 25. 3; 32. 19. 2.	
199/8	アリスタイノス①	Agortanos	ストラテゴス	デュメ	Livy. 32. 19. 2; Plut. <i>Vit. Phil.</i> 13. 4, 17. 3.	アルタルコスなどメガレーポリスともされるが、デュメの誤りとするのが有力 Cf. F. W. Walbank [1967] <i>Commentary on Polybius</i> vol. II, Oxford, p. 287.
	メムノン	Memnon	タミナルゴイ	ペリネ	Livy. 32. 22. 5.	
	アエシダモス	Aenestidemos	軍指揮官	デュメ	Livy. 32. 25. 6.	
198/7	ニコストラトス	Nicostratus	ストラテゴス	?	Livy. 32. 39. 7, 33. 14. 6.	
	アリスタイノス	Agortanos	講和会議への使節 (第二次ペクトニア戦争)	デュメ	Livy. 32. 32. 11; Polyb. 18. 1. 4.	199/8 年アリスタイノス①を参照
	ケレソオン	Seleoson	講和会議への使節 軍司令官	アエキオン	Livy. 32. 32. 11; Polyb. 18. 1. 4.	第二次ペクトニア戦争
197	テオクセノス	Theoxenus	ローマへの使節	アエキオン	Livy. 33. 18. 5.	ペクトイテ選征
196	タメケセノス	Tamēkēnos	ストラテゴス	デュメ	Polyb. 18. 42. 6.	
196/5	アリスタイノス②	Agortanos	ストラテゴス	メガレーポリス	Livy. 34. 24. 1.	199/8 年アリスタイノス①を参照
193/2	アロボイメン⑤	Phlorotimny	ストラテゴス	メガレーポリス	Livy. 35. 25. 6.	
	テイノス	Tisus	タウタルコス	バクトライ	Livy. 35. 26. 7.	
192/1	アエケセノス①	Aenestanos	ストラテゴス	メガレーポリス	Livy. 36. 31. 6.	スバルタとの戦争

190/89	テイオテアネス②	Διοφάνης	ストラテゴス	メガレー・ポリス	<i>Plut. Vit. Phil.</i> 16. 1.	
189	テイオテアネス	Διοφάνης	ローマへの使節	メガレー・ポリス	<i>Livy.</i> 38. 32. 6.	
	リュエコルタス	Λυκόρτας	ローマへの使節	メガレー・ポリス	<i>Livy.</i> 38. 32. 6.	
189/8	テイロポイメノン⑥	Φιλοτολίμν	ストラテゴス	メガレー・ポリス	<i>Livy.</i> 38. 30. 4; <i>Plut. Vit. Phil.</i> 16. 3.	
187/6	テイロポイメノン⑦	Φιλοτολίμν	ストラテゴス	メガレー・ポリス	<i>Polyb.</i> 22. 7. 1; <i>Plut. Vit. Phil.</i> 17. 4.	
	ニコチモス	Nicóbolos	ローマへの使節	エリス	<i>Polyb.</i> 22. 3. 4.	
	リュエコルタス	Λυκόρτας	エジプトへの使節	メガレー・ポリス	<i>Polyb.</i> 22. 3. 6.	
	テオトリダス	Θεοτόριδος	エジプトへの使節	シキオオン	<i>Polyb.</i> 22. 3. 6.	
	ロソテリス	Ροστέλης	エジプトへの使節	シキオオン	<i>Polyb.</i> 22. 3. 6.	
186/5	テリスタイノス③	Ἀρίστανος	ストラテゴス	デュメ	<i>Polyb.</i> 22. 7. 2.	199/8年テリスタイノス①を参照 188/7年にもストラテゴスだった可能性もあり <i>Cf. Errington [1969] (第一章注⑤) pp. 259-261.</i>
	アホロニダス	Ἀπολλωνίδας	ローマへの使節	シキオオン	<i>Polyb.</i> 22. 11. 6.	ローマへの使節への対応の不明
185/4	リュエコルタス①	Λυκόρτας	ストラテゴス	メガレー・ポリス	<i>Livy.</i> 39. 35. 5.	
184/3	テルコン①	Ἀρχων	ストラテゴス	テイゲイラ	<i>Polyb.</i> 22. 19. 1.	190/89年あるいは187/6年のストラテゴスの可能性もあり <i>Cf. Errington [1969] (第一章注⑥) pp. 255, 262f.</i>
183/2	テイロポイメノン⑧	Φιλοτολίμν	ストラテゴス	メガレー・ポリス	<i>Plut. Vit. Phil.</i> 18. 1.	テイロポイメノカ殺死したため スパルタの再加盟を報告 <i>Cf. F. W. Walbank [1979] Commentary on Polybius vol. III, Oxford, p. 248, 258.</i>
	リュエコルタス②	Λυκόρτας	代理ストラテゴス	メガレー・ポリス	<i>Polyb.</i> 23. 16. 1.	
	ピッボス	Βίττος	ローマへの使節	テルゴス	<i>Polyb.</i> 23. 18. 3.	
※ 182/1	リュエコルタス③	Λυκόρτας	ストラテゴス	メガレー・ポリス	<i>Polyb.</i> 24. 6. 4.	
181/0	リュエコルタス④	Υπερίβριος	ストラテゴス	シキオオン	<i>Polyb.</i> 24. 8. 1.	ゾレマイトオス5世の死により中止 スパルタの亡命者をめぐって カッリクラタスと共に リュエテイダス1の子孫か?
	カッリクラタス	Καλλικράτης	ローマへの使節	レオンテイオオン	<i>Polyb.</i> 24. 8. 8.	
	リュエテイダスII	Λυσιδάς	ローマへの使節	メガレー・ポリス	<i>Polyb.</i> 24. 8. 8.	
	テラトス (孫)	Ἀγάρτος	ローマへの使節	シキオオン	<i>Polyb.</i> 24. 8. 8.	カッリクラタスと共に
180/79	カッリクラタス	Καλλικράτης	ストラテゴス	レオンテイオオン	<i>Polyb.</i> 24. 10. 14	179/8年の可能性もあり <i>Cf. Errington [1969] (第一章注⑤) pp. 264f.</i>
174/3	クセナルコス	Xenarchus	ストラテゴス	テイゲイラ	<i>Livy.</i> 41. 23. 4.	
172/1	テルコン②	Ἀρχων	ストラテゴス	テイゲイラ	<i>Polyb.</i> 27. 2. 11.	
170/69	テルコン③	Ἀρχων	ストラテゴス	テイゲイラ	<i>Polyb.</i> 28. 6. 9.	
	ホリムピオス	Πολύμπιος	ストラテゴス	メガレー・ポリス	<i>Polyb.</i> 28. 6. 9.	
167	カッリクラタス	Καλλικράτης	ローマへの使節	レオンテイオオン	<i>Polyb.</i> 30. 13. 3.	第三次マケドニア戦争の勝利を祝う カッリクラタスと共に
	テゲジタス	Ἀγρίππας	ローマへの使節	?	<i>Polyb.</i> 30. 13. 3.	
	テリストタモス	Ἀγιστόβανος	ローマへの使節	?	<i>Polyb.</i> 30. 13. 3.	カッリクラタスと共に

	テリウシボス	Φιλίππος	ローマ軍への使節	?	Polyb. 30. 13. 3	カンリクテスと共に
165/4	エウレテス	Εὐρέτας	ローマへの使節	?	Polyb. 30. 30. 1	テカイア人の「人質」帰還を乞う
	テナシシテモスⅡ	Ἀναξίβιατος	ローマへの使節	メガラーポリス	Polyb. 30. 30. 1	テナシシテモスⅠの孫か？ エウレテスと共に
	サテュロス	Σάτυρος	ローマへの使節	?	Polyb. 30. 30. 1	エウレテスらと共に
160/59	テレクレス	Τηλεκλής	ローマへの使節	テイゲイテラ	Polyb. 32. 3. 14	テカイア人の「人質」帰還を乞う
	ケセノソ	Ξένων	ローマへの使節	テイゲイテラ	Polyb. 32. 3. 14	テレクレスと共に
159/8	テテリウシボス	Θεορίβιατος	ローマへの使節	メガラーポリス	Polyb. 32. 7. 1	ボリュエテオスの兄弟
	スデテラノス	Στέφανος	ローマへの使節	?	Polyb. 32. 7. 1	テリウシボスと共に
156/5	テレクレス	Τηλεκλής	ローマへの使節	テイゲイテラ	Polyb. 33. 1. 3	テカイア人の「人質」帰還を乞う
	ケセノソ	Ξένων	ローマへの使節	テイゲイテラ	Polyb. 33. 1. 3	テレクレスと共に
	テナシシテモスⅡ	Ἀναξίβιατος	ローマへの使節	メガラーポリス	Polyb. 33. 3. 1	2回目（目的は同じ）
※ 154/3	テレクレス	Τηλεκλής	ローマへの使節	テイゲイテラ	Polyb. 33. 14	テレクレスと共に
151/0	メナルキダス	Μενανόκιδας	ストラテゴス	スパルタ	Paus. 7. 11. 7. Cf. Polyb. 30. 16. 2	Cf. F. W. Walbank [1979] <i>Commentary on Polybius</i> vol. III, Oxford, p.698.
150/49	テイテイオス①	Αἰαῖος	ストラテゴス	メガラーポリス	Paus. 7. 12. 3. 6. Cf. Polyb. 38. 17ff.	Cf. F. W. Walbank [1979] <i>Commentary on Polybius</i> vol. III, Oxford, p.698.
149/8	タモクリトス	Δαμόκριτος	ストラテゴス	?	Paus. 7. 13. 1. Cf. Polyb. 38. 17. 9.	Cf. F. W. Walbank [1979] <i>Commentary on Polybius</i> vol. III, Oxford, p.698.
148/7	テイテイオス②	Αἰαῖος	ストラテゴス	メガラーポリス	Polyb. 38. 15. Paus. 7. 12. 3.	
147/6	クリトラテス	Κριτόλατος	ストラテゴス	?	Polyb. 38. 10. 3-11. 11	
	ソシクラテス	Σωσιγόρατος	ヒュボーストラテゴス	?	Polyb. 38. 18. 2.	
	テテリウシボス	Θεορίβιατος	ローマへの使節	メガラーポリス	Polyb. 38. 10. 11.	
146	テイテイオス③	Αἰαῖος	代理ストラテゴス	メガラーポリス	Polyb. 38. 15. 1f.	クリトラテスが戦死したため

シキュオン、スパルタはストラテゴスも出している。このことは、役職一般が集中する特定のポリスが、ノモグラフォイの場合も共通していることを示す。ただし、集中の度合がいくらか緩和されていることは注意すべきであろう。特に、役職一般では初期の加盟ポリスにしか見られなかった公職者の出身ポリスの分散が、後の加盟ポリスでも見られる。役職一般に含まれる高位の役職は構成人数に制限があるため、多くのポリスに割り当てることは難しいが、それに比べ重要度が低く、構成人数も多いノモグラフォイのような役職では、それが可能だったと推測される。

以上の分析から、役職一般とノモグラフォイの出身ポリスが特定のポリスに集中しているという共通の傾向が確認され

- ⑧ Rizakis [2008] (第一章注④) N120.
- ⑨ Livy. 32. 22. 2-8.
- ⑩ Larsen [1968] (第一章注②) pp.230f. また、先行研究でタミナルト同一視されるゲルミアなる役職もあるが、一例しか知られていない（Polyb. 38. 13. 1）その公職者の個人名や出身ポリスは不明のため、分析対象から除く。
- ⑪ F. W. Walbank [1933] *Aratos of Sicyon*, London: E. J. Brill [1969] (第一章注⑤) は「それぞれそれぞれストラテゴスに就任したアラトスとフィロポイメンの伝記的な研究であり、特にその就任年代などに補論で焦点が当てられている。
- ⑫ J. L. O'Neil [1984-86] 'The Political Elites of the Achaean and Aitolian Leagues', *Anc. Soc.* 15-17, pp.33-61.
- ⑬ Larsen [1968] (第一章注②) pp.234f.
- ⑭ JG. IV. 1². 73a. 年代は「前二二九／八年以降とされる（Rizakis [1995] (第一章注④) N597）。
- ⑮ Aymard [1938] (第一章注③) pp.383-385, けれど J. A. O. Larsen [1965] *Representative Government in Greek and Roman History*, Los Angeles, p.217 n.2; Id. [1968] (第一章注③) p.231 など反駁を述べた。
- ⑯ 同「H. Swoboda [1922] Die Neue Urkunden von Epidauros, *Hermes* 57, pp.518-534, 627 年以降とされる。Aymard 同様とされる。G. A. Lehmann [1983] Erörterungen zur Struktur des achaischen Bundesrates, *ZPE* 51, pp.237-261 & F. Gschnitzer [1985] Die Nomographenliste von Epidauros (JG IV 1². 73) und der Achäische Bund im späten 3. Jh. v. Chr., *ZPE* 58, pp.103-116 が挙げられる。
- ⑰ Lehmann [1983] (第一章注⑨) pp.245-248 は「大きなポリスにも輪番制が当てはまる可能性を指摘する。また一／三人の配分が、公職者全体における各ポリス出身者の割合と対応していることを主張する。Gschnitzer [1985] (第一章注⑨) p.106 を参照。
- ⑱ T. Corsten [1999] *Vom Stamm zum Bund*, München, pp.160-177.
- ⑲ 一九九九年の発掘で出土した、ローマ時代の城壁に転用されていたと考えられている。A.D. Rizakis [2003] Le collage des nomographes et le système de représentation dans le *Koinon* Acheen, in: Bursacis & Zouboulakis (eds.), [2003] (「エトノス」注②) pp.80-95 が、その碑文の内容とこれまでのヘギストラフォイの研究史を整理しているものの、テキスト自体は Rizakis [2008] (第一章注④) N.116 で初めて公開された。
- ⑳ Corsten [1999] (第一章注⑨) pp.165-172.
- ㉑ Polyb. 5. 94. 1.
- ㉒ 「ペルシア人の (της Περσικῆς) なる部分」は「原史料には「祖国の (της πατρίδος)」である。この場合、「祖国と負担を共にする集団」となり、シムンテレイアが明確に地区を指すとは言い難く、アカイア連邦全体を指す可能性もある。実際、城江による邦訳はその読みを採用している（ポリュビオス（城江良和訳）『歴史』二／二五八頁）。なぜその部分を「ペルシア人の (θερσικῆς)」と読む研究者が存在する（Cf. Walbank [1957] (第一章注⑥) p.624。Corsten が言及するところの根拠は Polyb. 38. 16. 4 「ペルシア人と彼らと負担を共にするもの (Περσικῆς καὶ τὸ μετὰ τοῦτον οὐνερειλικόν)」であるが、これは前注 Polyb. 5. 94. 1 のシムンテレイアが地区を示すように前提に基づいて。
- ㉓ Polyb. 4. 59. 2 (「デューメ、ファライ、トゥリタイアに言及」); 5. 95. 7 (「デューメ、バトッライ、ファライに言及」).
- ㉔ Polyb. 4. 60. 4-10.
- ㉕ Larsen [1968] (第一章注⑥) pp.220-221, 497 n.3.

②⑥ 公職者一般については、ONeil [1984-86] 第一章注⑫) がまとめたリストを参考に、筆者が若干の追加を行った。依拠史料については、表三を参照。

②⑦ 実際、シキュオンではアラトス、メガレーポリスではフィロボイメンの複数回の就任が大半を占める。

②⑧ デュメとフアライは前二八一／〇年に連邦を再建したポリスに含まれ (Polyb. 2.41.1-12)、カリュネイアもそれから数年以内にアカイア連邦に加盟した (Polyb. 2.41.14-15)。アイゲイラとレオンテイオンの加盟時期は不明だが、前述の三ポリスと共に、再建以前の初期ア

カイア連邦に加盟していたとされる (Polyb. 2.41.7-8)。

②⑨ 分析の依拠史料の多くがポリュビオスに由来し (表三)、またポリュビオスの出身ポリスであるメガレーポリスからの事例が多い点より、この結果がポリュビオスの周囲の状況のみを伝えたものでしかないという可能性もある。ただし、メガレーポリスがかつて属していたアルカディア連邦の諸ポリス出身の公職者が、メガレーポリス以外には見いだせない一方で、初期の加盟ポリス出身の公職者については細かに出身ポリスを明示している点から、この結果を単にポリュビオスの身内びいきや無知のみに帰すことは妥当ではないだろう。

第二章 ポリスに代わる単位——エトノス

第一節 エトノスの新しい解釈

それでは、アカイア連邦において、役職全体に共通する割り当ての単位とは何だったのか。前章で言及したシュンテレイア以外に、そのような単位は現存史料に明言されていない。しかし、アカイア連邦の制度に精通していたはずのポリュビオスが言及していないことは、逆に一つの示唆を与える。それは、そのような単位が、明言せずとも当時の人々に理解できた、(と少なくともポリュビオスは考えた) ということである。すなわち、役職の割り当ては、当時の人々の間で一般的なペロポネソス半島の区分を単位としていたと推定される。残念ながら、本稿が対象とするアカイア連邦の時代に、そのような認識を明示する史料は見られない。そこで、時代は下るものの、ペロポネソス半島全体を区分して記述したストラボンとパウサニアスを、まずは議論の足がかりとする。

後一世紀に成立したとされるストラボンの『地理誌』は、ペロポネソス半島全体を扱うに当たり、「エトノス」とい

う単位によって、エリス、メッセニア、アカイア、地峡地域（シキエオン周辺とコリントス周辺）、ラコニケ、アルゴリス、アルカディアに区分している。^①一方、後二世紀に『ギリシア案内記』を著したパウサニアスは、その著書の構成からペロポネソス半島をアルゴリス、ラコニケ、メッセニア、エリス、アカイア、アルカディアの六つの「モイラ（部分）」に区分しているとされる。^②地峡地域をアルゴリスに含むか否かの違いはあるが、それ以外の区分で両者は共通している。時代の異なる二人が、ほぼ同じ認識を持っていることから、これは一般的な認識に近いと考えられる。ただし、区分の単位を表す語が両者で異なることから、それらの語が役職の割り当ての単位を特別に意味していたとは限らない。確実なことは、両者が区分に用いた単位が、アカイアに住むアカイア人、アルカディアに住むアルカディア人のように、その地域に住む人々を表す際にも用いられることである。このことは、地域だけでなく、そこに住む人々を認識する単位でもあったことを示す。つまり、両者が用いたのは、地域的アイデンティティに基づく単位とみなすことができる。

このようなアイデンティティに基づく単位の捉え方の参考となるのが、エスニシティ研究による新たなエトノス解釈である。従来エトノスは、ポリスあるいは連邦の前段階に位置する原始的な共同体とされ、部族国家と同義とされてきた。^③それは同時に「後進的」であることを意味する。この認識は、当時の研究者だけでなく、古代人の認識も反映していた。例えば、トゥキュデデスやアリストテレスによるエトノスへの言及は、彼らの住むポリス世界を説明するための補助的なものであった。^④他方で、エトノスは部族国家から発展した連邦にも適用された。^⑤しかし、エトノスの基本的な意味が「集団」であることから、Larsen は連邦を指す言葉としてエトノスは適切でないと主張する。彼は、本来部族国家を示すべきエトノスが古代において連邦を意味するのは、他に用いる言葉がなかったことによる慣用的なもので、「先進的な」連邦の本質を示してはいないと考えていたのである。^⑥伝統的に、エトノスにはポリスや連邦と対置されるネガティブな意味が込められていた。^⑦

しかし、近年の考古学的調査の成果を基にした研究は、エトノスを「エスニシティ」のアプローチから捉え直そうとし

た。^⑧ 細かな意見の相違はあるものの、彼らの研究によれば、エトノスとは擬似的な血縁関係への帰属意識や、独自の歴史や制度、信仰などを共有した集団とされ、それが今日の通説ともなっている。^⑨ その中で、エトノスが決して原初から一貫したものではなく、可変的な集団であるという点は注目に値する。エトノスは、伝統的な研究が部族国家を当てはめたような、何らかの政治組織を指す言葉ではなく、その時々々の自己認識にあわせて変化する人々の集団なのである。これは、エトノスという語が元来単なる「集団」を表す言葉であり、政治的な意味合いを有していなかったことから、納得されるであろう。^⑩ このエトノス解釈に従えば、あるポリスの構成員が、そのポリス以外の人々と、ポリスとは別のレベルで祖先や歴史を共有することも可能である。つまり、ポリスと同時に、それを含みこむエトノスが並存するのである。これによって、「部族国家（エトノス）から連邦国家（あるいはポリス）へ」という単線的な発展モデルは成立しなくなり、エトノスはネガティブな位置づけから解放される。さらに、ポリスとの並存だけでなく、例えば「ポイオティア人」や「イオニア人」、「ヘレネス（ギリシア人）」といったより大きな集団もエトノスと捉えれば、複数のエトノスが入れ子状態で並存することが可能となる。^⑪ 先に示したストラボンやパウサニアスの用いた地域的アイデンティティに基づく単位も、このような新しい解釈に従えば、現代的な分析概念としてのエトノスと捉え直すことができるだろう。

第二節 アカイア連邦における「エトノス」

前節のような新しい解釈を用いる場合、エトノスという分析概念は様々な基準によって多様に区分され、結果としてエトノスという語だけでは何を指しているのか判然としなくなる。そこで、新しい解釈に従ってエトノスを捉えるとき、その基準が明示されねばならない。前節で確認したように、ストラボンやパウサニアスにおける「エトノス」は地域的アイデンティティに基づいていた。^⑫ 本節では、この地域的アイデンティティの存在を示す要素を確認し、それがアカイア連邦の時代にも見られるのかを検証することで、アカイア連邦における「エトノス」を捉えていく。

（二） アルカディア

まず、地域的アイデンティティの存在を端的に示す例が、ポリュビオスの自己認識である。彼は、その出身ポリスであるメガレ・ポリスや、役職を務めたアカイア連邦だけでなく、ペロポネソス半島中央部のアルカディア地域にも帰属意識を有していた。同盟市戦争の最中、アルカディア地域のポリスであるキュナイタの凄惨な内紛の経緯を記したポリュビオスは、キュナイタ人の残虐さはアルカディア人 (*τοὶ τῶν Ἀρκάδιων ἄνθρωποι*) の中でも例外であるとして、アルカディア人の擁護を図っている。^⑬ ポリスが位置する地域への帰属意識は、地域的アイデンティティを示す第一の要素である。また、アルカディア諸ポリスがドーリス人の侵入の影響を受けなかった土着の出自を想定し、リュカオンを共通の始祖とする認識を有していたことが先行研究で指摘されている。^⑭ 独自のアルカディア方言の存在からも、擬似的な血縁関係や独自の文化・歴史（記憶）の共有が、地域的アイデンティティの存在を示す一つの要素であったことがわかる。また、前四世紀にアルカディア連邦という政治組織を既に形成していただけでなく、アカイア連邦に加盟した後の前二〇八年、マイアンドロス河畔のマグネシアにアシュリア（不可侵）を認めた書簡が、アカイア連邦とは別にアルカディアの諸ポリスからも送られている。^⑮ このように、その地域に属する諸ポリスが協調行動をとる点も、地域的アイデンティティを示す要素であろう。これらをまとめると、地域的アイデンティティを示す要素とは、地域への帰属意識、その地域で共有された血縁関係や文化・歴史、地域に属する複数のポリス（あるいは人々）による協調行動である。本稿は、それらを基準としてアカイア連邦における「エトノス」を捉える。以上の分析からは、アルカディア地域に住む人々がアルカディアという「エトノス」を形成し、それがアカイア連邦と並存していたことが確認された。^⑯ 以降、アルカディア以外の各地域を同様に確認していく。

(二) アカイア

ペロポネソス半島北部のアカイア地域への帰属意識が、ヘレニズム時代以前に形成されていたことは、ヘロドトスやトゥキュデデスにも言及されている。また、前四世紀に「アカイア人」と刻まれた硬貨が流通していたことは協調行動の一例であろう。^{①⑦} また後代には、ドーリス人に追放された先住民アカイア人を彼らの始祖とみなしていた。^{①⑧} そして、ヘレニズム時代のアカイア連邦の母体となった初期のアカイア連邦が、アイギオンに形成されたゼウス・ホマリオンの聖域を集会の場として成立したことは、彼らの共通の文化を象徴する。^{①⑨} 何よりも、アカイア連邦の再建がアカイア人の手によるものだというポリュビオスの認識は、アカイア連邦の核として、アカイアの「エトノス」が当時も存在していたことを明示する。

(三) エリス

エリスは、ペロポネソス半島北西部を表す地域名であるとともに、その地域の中心市であるエリスというポリスも指す。先行研究によれば、都市エリスが前六世紀までに、近隣の有力ポリスのピサと全ギリシア的な聖域であるオリュンピアを併合し、前五世紀にはその領域をさらに拡大した。その後、スパルタに敗れたことで多くの領域を失うが、すぐにそれらを回復し、前四世紀半ばに一時的に独立していたピサを再併合して以降、再び全地域を都市エリスが支配するようになった。つまり、「エトノス」と捉えられる地域としてのエリスは既に前五世紀に成立していたのである。領域内の他のポリスは存続したものの、都市エリスに支配される従属的な地位におかれていたと考えられている。^{②①} 都市エリスと離れた場所にあるポリス、レブレオンをエリスとラコニケの境界とするトゥキュデデスの記述は、それを裏付けるであろう。^{②②}

この状況は、前三世紀末にも継続していた。ポリュビオスの記述からは、都市エリスとは異なる場所やポリスが地域としてのエリスに属するという認識が窺われる。^{②③} 少なくとも地域外の間人であるポリュビオスは、エリスを一つの地域とし

て認識していた。そして、都市エリスおよびその支配下のポリスがアカイア連邦に加盟するまで、それに対立するアイトリア連邦やセレウコス朝と一貫して同盟していたことは、ヘレニズム時代にも地域としてのエリスが「エトノス」として協調した行動をとっていたことを強く示す。²⁴特にアイトリア連邦との関係は、アイトリアから帰還したエリスの王家の子孫オクシュロスを共通の始祖とする後代の認識が、アカイア連邦の時代にも存在したことを思わせる。²⁵祖先の共有だけでなく、全ギリシア的なオリュンピア競技祭を開催する地であったことも地域的アイデンティティの形成にとって重要な要素であった。²⁶

（四）メッセニア

ペロポネソス半島西部のメッセニアが、メッセニア戦争の敗北によりスパルタに従属したことはよく知られている。²⁷前四六〇年代の第三次メッセニア戦争にも敗れたが、前三七〇／六九年にエパメイノンドスのペロポネソス遠征によってその支配から解放されると、メッセネというポリスが創建された。²⁸こうした記憶やメッセニア独自の信仰から、²⁹同じくドーリス系の始祖が想定されるスパルタとは異なるという意識、すなわちメッセニアの地域的アイデンティティの起源は古いと考えられてきた。

しかし、考古学的調査からは前古典期のメッセニアとスパルタの文化的差異は見いだせず、むしろ前四世紀以降のメッセニアの信仰も典型的なスパルタのそれと変わらないと指摘する先行研究が現れた。それによれば、スパルタ支配以前のメッセニアと前四世紀に新しく誕生したメッセニアとの間には直接の関係はなく、後者がスパルタ支配の中で前者を核とした地域的アイデンティティを新しく形成したというのである。³⁰この見解は、メッセネの創建後、ただちにメッセニア全体がスパルタの支配から離脱せず、南部やメッセニア湾岸のモトネ、アシネ、ファライは、前三三八年にフィリッポス二世によってメッセネに与えられるまでスパルタの支配下にあった事実と矛盾しない。³¹メッセニアという地域的アイデンテ

イティの形成は、比較的新しいと考えるべきであろう。

この新しい地域的アイデンティティは、アカイア連邦の下でも継続していたのだろうか。まず、ポリュビオスがアルカディアとスパルタに隣接する地域としてメッセニアに言及している。^{③③} その中で「メッセニア人に対して常に敵対的」と述べられるように、スパルタはヘレニズム時代にも外敵として認識されていた。メッセニア戦争やスパルタからの独立の記憶は、この時代に地域的アイデンティティを強固にする役割を果たしたと考えられる。^{③④} また、アカイア連邦への加盟以前、前二〇七／六年とされる、マイアンドロス河畔のマグネシアで発見された碑文では、「メッセニア人のコイノン」という表現が見られる。^{③⑤} 前三世紀末から前二世紀末の碑文でも、「トゥリア出身のメッセニア人」、「イトメ（メッセネの別名）出身のメッセニア人」といった表現が見られ、硬貨においても「メッセニア人」という銘が確認されている。^{③⑦} これらから、メッセニアという地域への帰属意識とそれに基づく協調行動がヘレニズム時代にも継続していた様子が窺える。

なお、「メッセニア人のコイノン」においては、メッセネの支配が前三世紀になつて強まったとされる。^{③⑧} つまり、前一九二年のアカイア連邦加盟以前に、エリスの「エトノス」同様、メッセネを中心とし、それ以外のポリスは従属的な地位におかれるという構造があった。その構造が、アカイア連邦加盟後も継続していたことは、前一八二年にいったん連邦から離脱したメッセネが再加盟した際、アビア、ファライ、トゥリアが分離され、メッセネとは別に連邦に加盟した事例から裏付けられる。^{③⑨} 連邦加盟後も、メッセネを中心とした「エトノス」は連邦と並存していたのである。

(五) ラケダイモン

スパルタは、それに従属するペリオイコイの共同体とともに「ラケダイモン人の国家」を形成していた。^{④①} これも一種のエトノスと考えられる。ただし、「ラケダイモン人の国家」はスパルタの支配領域を指し、ペロポネソス半島南部のラコニケ地域^{④②}だけでなく、古典期以前にはメッセニア地域も含んでいた。そのメッセニアは、前述の通りヘレニズム時代以

降「ラケダイモン人の国家」から分離し、別の「エトノス」を形成した。よって、「ラケダイモン人の国家」は、主にラコニケ地域と重なる「エトノス」となったと考えられる。本稿では、ラケダイモン人という自己認識に従って、この「エトノス」をラケダイモンとする。

スパルタを中心とするラケダイモンは、前二二二年のクレオメネス戦争、前一九五年のナビス戦争の敗北により、さらにその支配領域を縮小させ、最終的に前一九二年にスパルタはアカイア連邦に加盟した。その過程で、「エトノス」は消失していったのだろうか。アカイア連邦に加盟したスパルタでは、親アカイア派と反アカイア派の内紛が生じ、前一九一年に後者が政権を奪取すると、前者は南岸部に逃れた。^{④②}この事例からは、アカイア連邦への対応をめぐり、スパルタと南岸部のポリスとの間で政治的な一体性が失われているように見える。しかし、スパルタから分離したはずの南部のペリオイコイ共同体が「ラケダイモン人のコイノン」を結成したことは、ラケダイモンというアイデンティティが維持されていたことを示す。^{④③}その結成時期については議論があるものの、南部のペリオイコイ共同体がスパルタから分離させられた前一九五年であれば、^{④④}スパルタと分かたれてなお、ラケダイモンという帰属意識を維持していたことになる。また、「ラケダイモン人のコイノン」の中心的祭祀の一つ、アスポス付近のアポロン・ヒュペルテレアタスの神官にスパルタ人が就任している。^{④⑤}このことは、スパルタがこのコイノンの構成ポリスであることを直ちに示すわけではないが、祭祀を通じて、スパルタとそこから分かたれたペリオイコイ共同体が一つの「エトノス」を維持していた可能性を強く示唆する。さらに、アウグストゥス帝期に結成された「自由ラコニア同盟」の加盟ポリスは、「ラケダイモン人のコイノン」と重なる部分もある。^{④⑥}以上より、アカイア連邦加盟以降も、ラケダイモンという「エトノス」が継続していたと考えられる。

（六） アルゴリスと地峡地域

ここまで検討してきた「エトノス」は、ストラボンとパウサニアスで共通していた。唯一異なっていたのは、ペロポネ

ネソス半島北東部のアルゴリス地域と地峡地域であった。ストラボンが地峡地域をアルゴリスの外にあるとする一方、パウサニアスは地峡地域をアルゴリスに含んでいる。^{⑧⑨}アカイア連邦加盟以前に、この地域が一つの地域的アイデンティティを持っていたかは疑わしい。この地域の人々は、確かにドーリス系の出自を共有していたものの、^{⑨⑩}あくまでもアルゴリスと地峡地域は二分されていた。例えば、アルゴリスに位置するアルゴスは伝統的にスパルタと敵対し、ペルシア戦争やペロポネソス戦争でも中立、時にアテナイに与した。一方で地峡地域に位置するコリントスは、ペルシア戦争ではギリシアに、ペロポネソス戦争ではスパルタに与し、コリントス戦争の際にはスパルタに反旗を翻している。また、四大競技祭のうち、ネメア祭はアルゴスが、イストミア祭はコリントスがそれぞれ主催している点でも一つにまとまっていたとは言い難い。地峡地域に位置するスキュオンも、かつてはアルゴスの支配下にあったとされるが、僭主クレイステネスの下でアルゴスから文化的な独立を図ったと伝えられる。^{⑪⑫}主に古典期のポリスを扱った現代の研究書でも、アルゴリス地域と地峡地域は別の章で扱われている。^{⑬⑭}

では、ヘレニズム時代の両地域はどうだったのか。この地域で再建後に初めてアカイア連邦に加盟したのは、スキュオンである。これは同時に、アカイアの「エトノス」以外のポリスとしても初めての加盟であった。以後、スキュオンはアカイア連邦の中心的ポリスとなっていく。アラトスによる解放までマケドニア軍の占領下にあったコリントスは、連邦に加盟するもクレオメネス戦争では連邦から離反している。^{⑮⑯}戦後に再びマケドニアの支配下におかれ、第二次マケドニア戦争でローマ側について勝利するまで、その状態が継続した。^{⑰⑱}しかし、その後、少なくとも史料上にアカイア連邦とコリントスの対立は見られない。前一二六年のアカイア戦争後に、ローマがコリントスを徹底的に破壊した事件は、コリントスがアカイア連邦を象徴するポリスであったことを窺わせる。そのコリントス破壊後、スキュオンがイストミア祭の開催を引き継いだことから、地峡地域のこの二ポリスは密接な関係を有していたと考えられる。

他方、親マケドニア派の僭主によって支配されていたアルゴスは、前三世紀末の一時的なマケドニア弱体化と、それに

伴うアカイア連邦の隆盛をみて、アカイア連邦に加盟した。^{⑤④}しかし、アルゴスはコリントス同様その後のクレオメネス戦争で離反し、その後もアカイア連邦に反抗的な姿勢を見せる。第二次マケドニア戦争では、ローマに与することに反対し、アカイア連邦から離反した。^{⑤⑤}アルゴスはその後、フィリッポス五世によってスパルタのナビスに引き渡される。^{⑤⑥}第二次マケドニア戦争後に、スパルタの領有するアルゴスをめぐってアカイア連邦とナビスとの対立が表面化すると、前一九五年、フラミニウス率いるローマ軍の援助を受けたアカイア連邦がナビスを破り、スパルタの支配下にあったアルゴスは連邦に再加盟した。^{⑤⑦}

以上の状況からは、アカイア連邦加盟後も、アルゴスとコリントス、シキュオンの間に同じ地域への帰属意識や協調行動は見られず、一つの「エトノス」であったとは考えられない。少なくとも、密接な関係を有したコリントスとシキュオンの海峡地域と、アルゴスを中心とするアルゴリスの、二つの「エトノス」と捉えるべきであろう。

- ① Strabo. 8. 2. 2.
- ② Paus. 5. 1. 1. ただし、同箇所からはペロポネソス半島を五区分する人々の存在が窺われる (Cf. Thuc. 1. 10. 2; J. G. Frazer [1965] *Pausanias's Description of Greece. Translated with a Commentary* vol. III, p. 465)°.
- ③ F. Gschnitzer [1955] *Stammes- und Ortsgegenden im alten Griechenland. Wien. Stud.* 68, pp. 120-144; Id. [1971] *Stadt und Stamm bei Homer. Chiron* 1, pp. 1-17.
- ④ Thuc. 1. 5. 1-3, 3. 94. 4; Arist. *Pol.* 2. 1. 4ff. 7. 4. 7. ただし、アリス・トナレスは「連邦を指すエトノス」と「部族を指すエトノスを区別していた可能性もある (Cf. Lehmann [2001] 「ギリシア」注⑥) pp. 34-45)°。同時代の言及については C. Morgan [2003] *Early Greek States Beyond the Polis*. London & New York, pp. 7-9, 44-45 M.H.
- Hansen [1999] *Aristotle's Reference to the Arkadian Federation at Pol.* 1261a29 in: T. H. Nielsen & J. Roy (eds.) *Defining Ancient Arkadia*. Copenhagen, pp. 80-88 参考。
- ⑤ Larsen [1955] (表一章注⑤) pp. 22-31; Id. [1968] (第一章注⑤) pp. 3-8, 11; Giovannini [1971] 「ギリシア」注⑥ pp. 71-93.
- ⑥ Larsen [1968] (表一章注⑤) pp. 8-10, especially p. 7.
- ⑦ Giovannini [1971] 「ギリシア」注⑥, p. 13 及び「ギリシア世界の共同体全体を表す『*mōleis kai éthnē*』という慣用語における『エトノス』(*éthnē*) をネガティブに解釈したのもその表れである°。日本においてもそうした構図が浸透していたことは「合戦学」[1986] 『ギリシア・ポリスの国家理念——その歴史的發展に関する研究——』創文社二一〇頁、二二三—二四頁に多く表れている°。
- ⑧ その背景には「A・D・スミス (栗山靖司訳) [1999 原著 1986]

「ネイションとエスニシティ」(名古屋大学出版会)を代表とする社会学的議論がある。古代史でそれを取り入れた代表的な研究には以下⑤⑥がある。C.Morgan [1991] *Ethnicity and Early Greek States. Historical and Material Perspectives*. *PCPS* 37, pp. 131-161; Id. [2000] *Politics without the Polis. Cities and Achaeon Ethnos*, c. 800-500 BC in: Brock & Hodkinson [2000] (『まちとじ』 邦⑥) pp. 189-211; Id. [2003] (第1章注②); Ch. Ulf [1996] *Griechische Ethnogenese versus Wanderungen von Stämmen und Stammstaaten* in: Id. (ed.) *Wege zur Genese griechischer Identität*, Berlin, pp. 240-280; C.Morgan & J.M.Hall [1996] *Achaean Poets and Achaean Colonization* in: M.H.Hansen (ed.) *Introduction to an Inventory of Poets*, Copenhagen, pp. 164-232; J.M.Hall [1997] *Ethnic Identity in Greek Antiquity*, Cambridge などを挙げてみる。

- ⑤ 以下6書典類や参照: H.Canclik & H.Schneider (eds.) [2002] *Der Neue Pauly* Bd. 12/2, Stuttgart, s.v. "Ethnos" (K.Freitag); M.Gagarin et al. (eds.) [2010] *The Oxford Encyclopedia of Ancient Greece and Rome*, Oxford, s.v. "Ethnicity" (J.M.Hall), "Ethnos" (S.L.Larson); *OCD*⁴ s.v. "ethnicity" (C.Morgan & P.Heather).
- ⑥ Hall [1997] (第1章注②) pp. 35f.; Morgan [2003] (第1章注②) pp. 9f. n.58, n.59.
- ⑦ くハネンや叔へ J.M.Hall [2002] *Hellenicity. Between Ethnicity and Culture*, Chicago & 他 中 じ 金 持 は なる ポ ー ハ ン ト マ ン な ん 小 ち ち ハ ー ト ンス へ 扱 いた K.Freitag [2007] *Ethnogenese, Ethnizität und die Entwicklung der griechischen Staatenwelt in der Antike*, HZ 285, pp. 373-399 が代表例である。
- ⑧ 以降、本稿では地域的アイデンティティに基づく集団を「鍵括弧付の「エトノス」」と表記する。

⑨ *Polib.* 4. 20-21. Cf. Walbank [1957] (第1章注⑤) pp. 464-469; Roy [2003] (第1章注⑤) pp. 88f.

⑩ Strabo. 8. 1. 2. 8. 1; Paus. 8. 1. 1-6. 3. 例へては「J.Roy [1968] *The Son of Lycaon in Pausanias' Arcadian King-List*, *BSA* 63, pp. 287-292」に「わが」メガレーポリスの形成に携わった共同体の多くが「アルカディア全体」の伝説上の祖先とされるリュカオンを始祖に挙げている。メガレーポリスの建設の詳細は「長谷川岳男 [2008] 「メガロポリスの成立——ポリス再考序論——」豊田浩志編「神は細部に宿り給ひ」南窓社、四三二—三三頁も参照。

⑪ *Idagm.* 38. 1.58-68. ただし「その中には、アルカディアではなく、アカイアに属するはずのトゥリタイアが含まれる」。碑文を建立したマクネシア側のミスとする解釈もあるが、Paus. 6. 12. 8-9 にもトゥリタイア人をアルカディア人とする認識があった。これは「トゥリタイアの自己認識が曖昧であり、外部（例えばマクネシア）の判断によってその帰属が変化したためではないだろうか。「エトノス」の流動性を示す事例の一つといえる。本稿は「アカイア連邦の政治に深く関わったポリュビオスの記述の中でアカイア連邦を再建した最初の四ポリスにトゥリタイアが含まれている点から、アカイア連邦加盟時はトゥリタイアがアカイアの「エトノス」に属していたと考える」(Polib. 2. 41. 12)。

⑫ T.H.Nielsen [2002] *Arkadia and Its Poets in the Archaic and Classical Periods*, Göttingen, especially pp. 45-88. ただし「アルカディアの「エトノス」は常に一枚岩ではなかった。アルカディアの中にも別の基準によるエトノスが存在したことは、クレオオメネス戦争において、テゲア、マンティネイア、オルコメノス、カフユナイが独自の行動をうけていたことからも窺われる」(Plut. *Vit. Cleom.* 4. 7, Cf. Walbank [1957] (第1章注⑥) pp. 242f)。

- ① Hdt. 1. 145 と 147 断じ、前五世紀には「地区」がこの地域に存在した。Thuc. 2. 9. 2 等、ペロポネソス戦争の最初アカイア人が中立であったことや、前五一四世紀のアカイアについて、C. Morgan & J. M. Hall [2004] *Achaia* in: Hansen & Nielsen (ed.) [2004] 「註 129」注 ①、pp. 472-477 を参照。硬貨が、前三七〇-三六〇年頃のもの。Head, *Hist. Num.* p. 416 を参照。
- ② Strabo. 8. 7. 1: Paus. 7. 1. 1-8.
- ③ Polyb. 2. 39. 5f は初期の連邦の成立を前五世紀とせよ。連邦成立のメルクルとされる神域の成立について、Strabo. 8. 7. 5 を参照。その成立時期を前四世紀とせよ Morgan & Hall [1996] (第 1 章注 ②) 前五世紀と断ぜよとせよ F. W. Walbank [2000] *Hellenes and Achaeans: 'Greek Nationality' revisited* in: P. Flensted-Jensen (ed.) *Further Studies in the Ancient Greek Polis*, Stuttgart, pp. 19-33 の議論を要する。少なくともホメリオンの神域を中心としたアカイアの「エトノス」が形成されていたことは、意見が一致する。なお Morgan & Hall [1996] (第 1 章注 ②) p. 196 等、アキオンのホメリオンの神域とはなべ、クリケのホライオン神域が、前二三三年に破壊されるまで集合の場であったと指摘する。
- ④ Polyb. 2. 41. 11-15.
- ⑤ クレティズム時代より前のエリスについて、J. Roy [1997] *The Perioikoi of Elis* in: M. H. Hansen (ed.) *The Polis as an Urban Centre and as a Political Community*, Copenhagen, pp. 282-320 等、また T. H. Nielsen [2004] *Elis* in: Hansen & Nielsen (eds.) [2004] 「註 129」注 ① pp. 489-504、特に pp. 489-491 を参照。
- ⑥ Thuc. 5. 34. 1 など、レフレオンは後にトゥリフェリアと呼ばれる地域に含まれる。T. H. Nielsen [2004] *Triphylia* in: Hansen & Nielsen (eds.) [2004] 「註 129」注 ① pp. 540-546、特に pp. 543f を参照。
- ⑦ Polyb. 4. 9. 10 (トヘニア)、Polyb. 5. 3. 1 (キタノキ)。
- ⑧ 同盟市戦争における同盟関係等、Polyb. 4. 5. 4, 9. 10 等、また Polyb. 4. 59-67, 5. 91-102 など、を参照。ローブ・シリマ戦争について、Polyb. 20. 3. 1-5 を参照。
- ⑨ Paus. 5. 3. 5-4. 2.
- ⑩ Polyb. 4. 73. 10.
- ⑪ Strabo. 8. 4. 10: Paus. 4. 4-24. 4.
- ⑫ Thuc. 1. 101-103.
- ⑬ Paus. 4. 27. 5-7: Diod. 15. 66. 1. Cf. Frazer [1965] (第 1 章注 ②) p. 419; P. J. Stylianou [1998] *A Historical Commentary on Diodorus Siculus. Book 15*, Oxford, p. 435f.
- ⑭ 先哲武を追放せよ (Paus. 4. 3. 6) エリス人の侵入以前に信仰を捨てたエトノメのギオスを再び祀ったとされる (Paus. 4. 3. 9)。
- ⑮ N. Luraghi, [2002] *Becoming Messenian*, *JHS* 122, pp. 45-69; Id., [2008] *The Ancient Messenians. Constructions of Ethnicity and Memory*, Cambridge.
- ⑯ G. Shipley [2000] *The Extent of Spartan Territory in the Late Classical and Hellenistic Period*, *BSA* 95, pp. 367-390, especially pp. 385f.
- ⑰ Polyb. 4. 31-33.
- ⑱ Polyb. 4. 32. 4 第一、第二、第三次メッセニア戦争は、前三世紀か前二世紀とされるブリエネのシムロンの散文や、前二世紀頃のベネのリアノスの叙事詩の中で脚色されて伝えられていたと、パウサニアスの記述からは推測される (Cf. Frazer [1965] (第 2 章注 ②) pp. 411f)。フンテリテの維持に寄与した可能性は十分考えられる。

- ③④ *Magnum*. 43, 116-117.
 ③⑤ *FD* III. 4. 5; 4. 6.
 ③⑥ Head, *Hist. Num.* pp.431-2.
 ③⑦ G.Shipley [2003] *Messenia in: Hansen & Nielsen (eds.)* [2004] (『ミゼニア』) 註③ pp.547-550, 562; E.Meyer [1978] *Messenien und die Stadt Messene* (offprint from *RE* suppl. xv, 136-289), Munich, p. 284.
 ③⑧ Polyb. 23. 17. 2.
 ③⑨ 「ラケタイモン人の国家」にうつては、古山正人 [2010] 「ラケタイモン人の国家構造」『國學院大學大学院紀要 文学研究科』四二『一八三』一九六頁を参照。ペリオイコイの地位をめぐる近年の議論にうつては、古山正人 [2006] 「ペリオイコイ研究の現状」『國學院大學紀要』四四『一六三』一八九頁に詳し。
 ④① 一般に用いられる「ラコニア」は、古代には用いられなかった (Cf. Shipley [2000] (第1章註②) p.368 n.7).
 ④② その地域は、ナビス戦争での敗北後にアカイア連邦の保護下におかれていた。ただし、連邦には加盟しつづかなければ (Cf. J.Briscoe [1981] *A Commentary on Livy Books XXXIV-XXXVII*, Oxford, p. 164)。亡命者の存在は、この内乱に端を発するスパルタの離脱問題が前二一八八年に解決した際に言及される (Livy. 38. 30. 6-34. 9, Cf. Polyb. 21. 32c. 3)。Errington [1969] (第一章註⑤) pp.134ff.を参照。
 ④③ *IG* V. 1. 1226-7 = *SEG* 11. 938.
 ④④ Shipley [2000] (第1章註②) p.368 n.9.
 ④⑤ *IG* V. 1. 1014-1016, 古山正人 [2006] 「ラコニア南部地域ペリオイコイ共同体の動向」『國學院大學大学院紀要 文学研究科』三八『一

- 七一』一九四頁、特に一九〇頁も参照。
 ④⑥ Strabo. 8. 5. 5; Paus. 3. 21. 7, Cf. Shipley [2000] (第一章註②) p.368.
 ④⑦ Strabo. 8. 6. 4; Paus. 2. 1. 1.
 ④⑧ 代表的なポリスのアルゴスは、ドーリス人の侵入の後、最初に支配された都市として知られ (Paus. 2. 18. 7-19. 2)『コリントスやシキエトンのポリス』の王家出身者や始祖として知られる (コリントス: Paus. 2. 4. 3f. シキエトン: Paus. 2. 6. 6f).
 ④⑨ Hdt. 5. 67-68
 ④⑩ Hansen & Nielsen [2004] (『ミゼニア』) pp.462-471 (地域地域), pp.599-619 (アルゴス).
 ④⑪ 加盟しているPolyb. 2. 43. 4; Plut. *Vit. Arat.* 18-24. 離反しているPolyb. 2. 52. 2; Plut. *Vit. Arat.* 39. 3f. *Vit. Cleom.* 17. 3-5を参照。
 ④⑫ Polyb. 18. 46. 1-15; Livy. 33. 32. 1-10.
 ④⑬ Polyb. 2. 44. 6.
 ④⑭ Polyb. 2. 52. 2; Plut. *Vit. Arat.* 39. 4, *Vit. Cleom.* 17. 4-5, プルタルコスによれば、クレオメネスの奇襲を受けたアルゴス市民が、無抵抗でスパルタ軍を受け入れたこと。
 ④⑮ Livy. 32. 22. 8-12, その理由として、マケドニア王フィリップス五世との個人的なつながりの他、マケドニア王家とアルゴス人との血縁関係が挙げられていることは、エトノスの観点から興味深い (Cf. Hdt. 5. 22; Thuc. 2. 99. 3).
 ④⑯ Livy. 32. 38. 1-40. 11.
 ④⑰ ナビス戦争開戦しているLivy. 34. 22. 4f.を、アルゴスの再加盟しているLivy. 34. 41. 3f.を参照。



アカイア連邦における「エトノス」（太字）と主要ポリス（筆者作成）

第三章 アカイア連邦の「エトノス」統合政策

第一節 「エトノス」に基づく分析

前章では、アカイア連邦における公職者全体の割り当ての単位として「エトノス」を提示し、実際に七つの「エトノス」を確認した。本章では、その「エトノス」に基づいて公職者の出身を分析し、その有効性を検証していく。表二および三に示した全公職者の出身ポリスなどの「エトノス」に属していたのかについては、古典期のポリスを地域ごとにとまとめたCPCのポリス目録の区分と概ね一致する。ただし、トゥリフュリア地方のヒュパネについては、アカイア連邦の下

ではアルカディアの「エトノス」に属していたと考えられる。^①

分析にあたって、連邦の拡大にともなう役職の構成の変化を考慮し、各ポリスの加盟時期によってアカイア連邦の歴史を三区区分する。前二八一／〇年の連邦の再建から前二一七年の同盟市戦争の終結、すなわちアルカディアや地峡地域、アルゴリスの諸ポリスが加盟し、アカイア連邦の拡大が一段落するまでを第一期とする。続いて、前一九二年のスパルタ加盟以前を第二期、以後を第三期に分ける。第三期には、スパルタをはじめ、メッセニアやエリスの諸ポリスが加盟した。

以上の区分に基づき、まずは役職一般について検証する（表四）。第一期（のべ三一人）には、アカイアのエトノスに属する諸ポリス

表四：役職一般の出身「エトノス」の推移

	第一期		第二期		第三期		合計	
アカイア	9	29%	9	38%	13	26%	31	30%
アルカディア	6	19%	5	21%	19	38%	30	29%
アルゴリス	1	3%	0	0%	1	2%	2	2%
地峡地域	8	26%	1	4%	5	10%	14	13%
ラケダイモン					1	2%	1	1%
エリス					1	2%	1	1%
メッセニア					0	0%	0	0%
不明	7	23%	9	38%	10	20%	26	25%
合計	31	100%	24	100%	50	100%	105	100%

から九人（二九％）、アルカディアから六人（一九％）、アルゴリスからは一人（三％）、地峡地域からは八人（二六％）の公職者が出ている。出身ポリス不明者は七人（二三％）であった。続く第二期（のべ二四人）には、それぞれ九人（三八％）、五人（二一％）、○人（〇％）、一人（四％）となり、出身ポリス不明者は九人（三八％）である。最後に、第三期（のべ五〇人）はアカイアが三人（二六％）、アルカディアが一人（三八％）、アルゴリスが一人（二％）、地峡地域は五人（一〇％）、ラケダイモンとエリスが各一人（各二％）、メッセニアは○人（〇％）、出身ポリス不明者は一〇人（二〇％）となる。

全時期を通じて、アカイアとアルカディアが目立ち、地峡地域が次に多くの公職者を出す。一方で、アルゴリスと第三期に加盟したメッセニアやラケダイモン、エリスからは極端に少ない。ここで注目すべきは、アカイア以外の各「エトノス」では、公職者の出身ポリスが一つに限られていることである。これは、第一章で示した特定のポリスへの集中という現象が、「エトノス」単位で起きていたことを示す。特に、アルカディアのメガレーポリス、地峡地域のシキュオンはこの傾向が強い。ただし、そもそも役職一般の事例が見られないメッセニアはもちろん、事例数が少ないアルゴリスやエリス、ラケダイモンにおいても、アルゴスやスパルタ、エリスが役職一般を独占していたと即断はできない。

続いて、独占の割合が比較的低いノモグラフォイについて見てみよう（表五）。第一期または第二期に属するとされるエピダウロス碑文（二四人）^②では、アカイアの

表五：ノモグラフォイの出身「エトノス」

エビダウロス碑文			アイギオン碑文		
人数			人数		
アカイア	10	42%	アカイア	1?	
アルカディア	5	21%	アルカディア	12?	
アルゴリス	7	29%	アルゴリス	?	
地峡地域	2	8%	地峡地域	?	
ラケダイモン			ラケダイモン	3?	
エリス			エリス	?	
メッセニア			メッセニア	5?	
合計	24	100%	合計	21	

「エトノス」に属する諸ポリスからの出身者が一〇人（四二％）、アルカディアから五人（二二％）、アルゴリスから七人（二九％）、地峡地域から二人（八％）である。各「エトノス」において複数のノモグラフォイが割り当てられているのは、アカイアのアイギオンとデュメ、アルカディアのメガレーポリス、アルゴリスのアルゴス、地峡地域のシキュオンである。アカイアの「エトノス」以外で、複数のノモグラフォイを出すポリスは、各「エトノス」の中で一つに限られ、その三ポリスは、各「エトノス」の中で役職一般の割り当てを独占していたポリスと共通する。

また第三期に属するアイギオン碑文は、前半部の欠落により正確な数は不明だが、ノモグラフォイの数は連邦の拡大によって増加したと思われる。判明している二人のうち、アカイアの「エトノス」に一人、アルカディアに二人、ラケダイモンに三人、メッセニアに五人が割り当てられている。各「エトノス」で複数のノモグラフォイが割り当てられているメガレーポリスとスパルタは、役職一般の割り当てを独占していたポリスでもある。また、役職一般の事例が知られなかったメッセニアの「エトノス」では、メッセネが複数のノモグラフォイを割り当てられていた。

ここから、メッセネが役職一般を独占的に割り当てられていたと推測できる。ノモグラフォイの分析も、「エトノス」という単位に基づき役職が割り当てられていたことを示す。

ポリスに基づく先行研究の分析は、役職の割り当てにおける偏りを説明できなかった。しかし、「エトノス」に基づく分析から、その偏りは各「エトノス」の中に

優先的に役職を割り当てられるポリスが一つずつ存在していたためであることが示された。そして、そのようなポリスがアカイアを除く全ての「エトノス」にみられることは、連邦が「エトノス」のバランスに一定の配慮をしていたことを物語るといえよう。

第二節 アカイア連邦における「エトノス」の役割と統合の必要性

前節の分析結果は、アカイア連邦がポリスだけでなく、「エトノス」からも構成されていたという重層性を明らかにする。同じ「エトノス」に属する諸ポリスが行動を共にする傾向があったことは前章で示したが、そのため「エトノス」を通じて加盟ポリスの統合が連邦には求められたであろう。「エトノス」の中で、特定のポリスへ優先的に役職が割り当てられていたことは、そのポリスを代表として、各「エトノス」を統合しようとした連邦の政策の表れと考えられる。特定のポリスは連邦の政務に携わることで、連邦と各「エトノス」との橋渡し役となることを期待されていたのではないが、だが、「エトノス」ごとに事情は異なっていたと思われる。そもそもアカイアの「エトノス」で公職者の独占が見られないのは、連邦再建以前に既に強固な紐帯を形成しており、かつ連邦の核として他の「エトノス」を併合する主体であるため、そのような橋渡し役を設ける必要がなかったためであろう。また、地峡地域の「エトノス」の中で、地政学的にも重要なコリントスではなく、シキエオンが橋渡し役となっているのは、コリントスがクレオメネス戦争で連邦から離反したこと、前三世紀には一時期を除いて事実上マケドニアの支配下にあったこと、逆にシキエオンはアラトスの指導の下、アカイアの「エトノス」に属するポリス以外で初めて連邦に加盟したことなどの個別の理由が考えられる。

ただ、「エトノス」のバランスに配慮していたとはいえ、「エトノス」ごとの割り当てに差が見られることも確かである。これもまた、連邦の政策を反映するだろう。役職一般、中でも高位の役職であるストラテゴスにおいては、アルカディアおよび地峡地域と、アルゴリス、エリス、メッセニア、ラケダイモンとの差が著しいが、それは前者の「エトノス」がア

カイア連邦に協力的であるのに対し、後者が反抗的であったことによると思われる。アルゴスのアリストマコス、スパルタのメナルキダスがストラテゴスに就任した事例は、反抗的な「エトノス」の代表者をストラテゴスとして優遇すること、アカイア連邦への繋ぎ止めを図ったものと考えられる。しかし、ストラテゴスという重要な役職を常にそのような意図で決めるわけにはいかない。そのため、他の役職、特に構成人数の多いノモグラフィオイなどの役職が、役職一般に比較して多くそのような「エトノス」に割り当てられていたことを、ノモグラフィオイの「エトノス」分布は示している。ただし、アリストマコスによるアルゴスの離反や、メナルキダスと同時期のスパルタの反アカイアの姿勢、加盟後のメッセネの反乱などを鑑みるならば、連邦の政策は必ずしも思惑通りに機能していなかった。^③

以上の状況は、公職制度以外においても、「エトノス」に配慮した統合政策が必要とされていたことを示すだろう。ポリュビオスの主張するアカイア連邦の統一性は明らかに誇張であるが、それでもなお、実際にアカイア連邦は前二八〇年に再建されてから百四〇年間近く、一つの共同体として拡大しながら存続していた。では、公職制度以外に、どのような統合政策を用いてアカイア連邦は複数の「エトノス」の一体性を維持していたのであろうか。

しかし、エトノス研究が進展した現在でも、エトノスの統合の問題は等閑に付されている。その背景には、エトノスの形成過程や利用のされ方に焦点が当てられてきたことがある。^⑤確かに、エトノスが自己理解によって規定される以上、その形成について検討することは重要である。だが、「部族国家（エトノス）から連邦国家（コイノン／シュンポリティア）へ」という単線的な発展モデルが克服された今、改めてエトノスと連邦の関係を規定しなおさねばならない。^⑥そこで、如上の研究状況を踏まえ、アカイア連邦における「エトノス」の統合政策を、碑文上の「アカイア人のコイノン」という文言の用例と連邦の議会という二つの視点から明らかにしていく。^⑦

第三節 碑文にみられる「アカイア人のコイノン」

連邦を表すこともあるコイノンという語は、「共通の」を意味するコイノスの中性名詞化した言葉であり、古代ギリシアにおいて民会やポリスなど様々な紐帯に用いられていた言葉であった。^⑧従来の研究は、コイノンという語の意味を重視し、その結果、コイノンとは「共通のもの」、すなわち市民に「共通な」国家、「共通な」政府を表すため、連邦に適用されたのだと論じる。それ故、コイノンと表される共同体が、必ずしも連邦国家ではないという Latoud の指摘は正当である。^⑩しかし、汎用的なコイノンという語が、連邦という特定の共同体に適用された個別の歴史的背景こそが、連邦を捉えるうえで重要と思われる。というのも、それぞれ個別の文脈にある共同体を「共通のもの」と表そうとした意図が、そこには込められているからである。以上の観点から、本節では個別の背景の検証として、碑文にみられる「コイノン」の用例、特に「アカイア人のコイノン」という言葉に着目する。碑文におけるコイノンの用法を追うことで、その碑文を設置した主体がコイノンに込めた意図を読み取れる可能性が高いからである。^⑪

「アカイア人のコイノン」の確実な初出は前二二〇年代であり、^⑫ボイオティアとフォキスの「人質」に対してプロクセニアを与えることが、「アカイア人のコイノン」によって決議された。^⑬その後、前二世紀になつて頻繁にみられるようになる。「アカイア人のコイノン」がデュメのアリスタイノスを顕彰した碑文は、前一九六／五年にデルフォイに建立された。^⑭前一九〇年代半ばから前一八〇年代半ば、ミレトス人によってデルフォイに建立された碑文にもコイノンが見られる。^⑮この碑文には、小アジアのミレトスとマグネシアとの和解に際して送られた使節の出身ポリスと名前が列挙され、その中に「アカイア人のコイノン」が含まれていた。これは、アカイア連邦以外の建立主体もコイノンをういていた事例である。デルフォイには、「アカイア人のコイノン」がフィロポイメンの騎馬像を奉納したことを示す、前一八三年頃の碑文もある。^⑯「アカイア人のコイノン」への徳と好意を称えたアリスタモスの顕彰碑文は、アカイア連邦に加盟するエビダウロ

スによって前一八二年に建立された。^{①⑦} オリュンピア出土の前一六九年頃の碑文は、「アカイア人のコイノン」によってローマのコンスルが顕彰されている。^{①⑧} 最後に、前二世紀半ばとされるアイゲイラ出土碑文では、あるポリス（おそらくアカイアのアイゲイラ）がポリュクラテスを「自身のポリスとアカイア人のコイノン」への徳と好意ゆえに顕彰している。^{①⑨}

「アカイア人のコイノン」という語を含む碑文が見られ始めた前三世紀末は、連邦がアカイアの「エトノス」を越えて拡大した時期であった。しかし、その過程で連邦の一時的な分裂も経験した。特にクレオメネス戦争では、戦況の悪化によりアルカディアやアルゴリス、地峡地域の加盟ポリスが多く占領され、あるいは離反した。^{②①} その中でも、アルカディアのマンティネイア、アルゴリスのアルゴス、地峡地域のコリントスといった有力ポリスが自発的に離反したことは大きな痛手となったであろう。^{②②} その状況を踏まえれば、碑文における「コイノン」は、異なる「エトノス」を「アカイア」の名の下で「共通のもの」にする意図を明確に示したものと考えられる。^{②③} 「エトノス」を越えた拡大があまり見られなかった前四世紀のアカイア連邦に関わる碑文の中には「コイノン」が用いられていないのも、その解釈を補強する。^{②④} また、碑文の多くがデルフォイやオリュンピアなどアカイア連邦の外部の人目にさらされる場所に奉納されていたことから、アカイア連邦がその統合の意図を対外的に主張していた可能性は高い。ミレトス人の建立した碑文にこの表現が見られたことは、そうした認識が広まった影響と解釈できる。^{②⑤} そして、あくまでも推測ではあるが、ローマ支配下でギリシア本土が属州「アカイア」であったことは、こうした連邦のプロパガンダの延長線上で理解できるかもしれない。

第四節 アカイア連邦の議会

碑文にみられた「アカイア人のコイノン」は、「アカイア人」の名の下でアカイア連邦が一つの共同体であることを外部に喧伝する統合政策を表していたと、前節では考察した。一方で、アカイア連邦に加盟するポリスが「アカイア人のコイノン」を用いる例も見られた。前一八二年のエピダウロスによる顕彰碑文と、前二世紀半ばのポリュクラテスの顕彰碑

文である。後者を決議した主体と想定されるアイゲイラは、アカイアの「エトノス」に属するため、「アカイア人のコイノン」を用いることに抵抗はなかったであろう。他方で、アルゴリスの「エトノス」に属するエビダウロスでこのような認識が見られたことは、少なくとも前二世紀以降、「エトノス」が異なるポリスにも「アカイア人」の下での統合が受容されていたことを示す。しかし、そのような受容が必ずしも「エトノス」全体に普及していなかったことは、同じくアルゴリスに属するアルゴスが前二世紀に入ってもアカイア連邦に反抗的であったことから窺われる。「アカイア人」という「エトノス」を強調した統合政策は、連邦の抱える他の「エトノス」に対して必ずしも有効でなかったのである。そこで、本節では、碑文における「アカイア人のコイノン」以外の、「アカイア連邦の内部に対する別の統合政策を考察する。その手がかりはアカイア連邦の議会にある。アカイア連邦には定例のシュノドスと臨時のシュンクレトスという二種類の議会が招集されており、議論はあるものの、長谷川の研究に従えば、どちらにも評議会と総会が招集可能であった。評議会は代表者のみが参加可能な議会で、総会は連邦に属する成人男性市民の全てが出席可能な議会だったとされている。この連邦の議会、特に総会は、理論的にはすべてのポリス、「エトノス」から分け隔てない政治参加を可能にする組織であった。つまり、議会は統合機能をもっていたと考えられる。²⁶⁾しかし、議会は本来の政治決断の場であり、統合機能は結果として生じた副作用にすぎない。果たして、アカイア連邦は副作用たる議会の統合機能を利用する意図を持っていたのか。

その意図を示唆するのが、前一八八年に当時のストラテゴスであるフィロポイメンによって行われた議会制度改革である。それによって、定例議会であるシュノドスの招集場所は各ポリスの持ち回りとなったが、それ以前のシュノドスはアイギオンに招集されていた。アイギオンとは、ゼウス・ホマリオンの聖域があり、アカイアの「エトノス」の形成に大きく寄与したアカイア色の強い場所である。フィロポイメンがどのような理由でこの改革を主導したのかは、史料がローマ時代のリウウィウスの記述ということもあり、はつきりしない。確かに、前一九一年にペロポネソス半島が統一されたた

め、半島北辺のアイギオンへの総会招集が不便になったという現実的な理由も考えられる。しかし、この改革がダミウルゴイという公職者やアイギオンの住民の強い反対を受けてもなお断行されたことは、この改革に際して、連邦側が明確な目的をもっていたことを示す。その目的は、もう一つの議会シュンクレトスの招集場所から推測できる。臨時議会であるシュンクレトスは、その性格上、招集場所は時によって変化し、シュノドスの改革以前には、直前に加盟したラケダイモン、メッセニア、エリスを除く各「エトノス」に属するポリスで招集されたことが知られている。アカイアの「エトノス」以外で招集されたシュンクレトスによって、その統合機能が発揮されたとすれば、連邦側がその機能をシュノドスでも活用しようと考えた可能性がある。これが、改革を断行した目的ではないだろうか。ただし、実際に史料から知られる改革後のシュノドス一七例のうち、場所が判明しているのは、メガレーポリスが四例、コリントスが三例、アイギオンが二例、シキュオンが一例の計一〇例で、残りの七例は不明とされる。アカイアとアルカディア、地峡地域に限定されており、シュノドスによる統合機能がそれ以外の「エトノス」で発揮されていないように見える。しかし、シュノドスの改革後のシュンクレトスがアルゴリスとエリスの「エトノス」でも招集されていることから、史料に残っていないシュノドスがこれらの「エトノス」でも招集された可能性を示唆するだろう。

以上の議会改革による統合政策はポリスへの配慮ともみなせるが、注目すべきはアイギオンというアカイア色の強い場所から議会を解放したことである。アカイアの「エトノス」、そしてアカイア連邦成立の要となった場所から定例議会であるシュノドス招集の独占権を取り上げ、その招集場所を持ち回りにしたことは、「アカイア」連邦に統合される形になったその他の「エトノス」への連邦側の配慮といえるだろう。前一八八年の議会改革の時期に重なるスパルタの分離運動も、その改革に影響を与えたと考えられる。

アカイア連邦は、対外的に「アカイア人のコイノン」を謳う一方、議会の統合機能を利用するため、「アカイア」からの脱却も図った。アカイアの「エトノス」をめぐる矛盾するような方法を用いても、「エトノス」を連邦につなぎと

めようとする姿勢は、アカイア連邦の「エトノス」への配慮を際立たせている。

- ① トゥリフェリア地方は、前四世紀初めにエリスから分離した後、独自の地域アイデンティティを形成したとされるが、その後アルカディアの「エトノス」に取り込まれたと考えられる (Cf. Nielsen [2002] (第二章注⑮) pp.229-269)。
- ② 正確には、アルゴスの加盟 (前二二九/八年) から、ローマとの同盟によるアルゴスの脱退 (前一九八年) の間とされる。
- ③ アリストタモコスの裏切りは Polyb. 2. 60. 6、前二五〇年頃のアカイア連邦とスバルタの対立は Paus. 7. 12. 4-14. 3、メッセネの反乱は Polyb. 23. 12. 3, 16. 1-13. 17. 2; Livy. 39. 49. 1-50. 9; Plut. *Vit. Phil.* 18. 3-20. 3; Paus. 8. 51. 5-7を参照。
- ④ Polyb. 2. 37. 11.
- ⑤ アカイアの「エトノス」の形成については、Walbank [2000] (第二章注⑨) がある。本稿の対象には含まれていないが、ボイオタイアの例として、AKühr [2006] *Als Kadmos nach Boiotien kam. Polis und Ethnos im Spiegel tebanischer Gründungsmythen*, Stuttgart を参照。
- ⑥ H.Beck [2003] *New Approaches to Federalism in Ancient Greece. Perception and Perspectives in: Bursalis & Zournoulakis* (eds.) [2003] (第三章注③) pp.177-190 に、同様の課題が指摘されている。
- ⑦ 外的要因、特にスバルタやマケドニアなどの脅威もアカイア連邦の統合に寄与したのは確かである。だが、本稿の問題意識が「エトノス」と連邦の関係にある以上、本章では、内的要因であるアカイア連邦の政策を扱う。
- ⑧ 合版 [1986] (第二章注⑦)、二〇九頁。
- ⑨ Giovannini [1971] (はじめに注⑤) pp.14-24 は、用語の考察からそれらが古代における連邦意識を示すという考えを否定する。これに反論したのが、Walbank [1985 原著 1976/7] (はじめに注⑤) pp.21-26であった。
- ⑩ Larsen [1968] (第一章注②) p.8.
- ⑪ 前野弘志 [2007] 「アッティカの碑文文化——政治・宗教・国家——」(広島大学出版会) を参照。本来ならば、非文字情報を含めて碑文を再現したうえで、議論を進めなければならない。しかし、今回扱う碑文は必ずしもその全てを復元できるわけではないため、主として碑文を設置した主体や場所に着目する。
- ⑫ それ以前の事例として、前二三四年頃とされるオルコメノスの加盟決議碑文 (IG V 2. 344 = Syl³ N.490) にも「アカイア人のコイノン」が記されていたと思われる。しかし、五行目や一〇行目の「アカイア」や「コイノン」の部分が復元によるため、本稿ではこの碑文を明確な事例としては取り上げない。
- ⑬ Syl³ N.519 = Rizakis [2008] (第一章注④) N.118.
- ⑭ *FD* III. 3. 122 = Rizakis [1995] (第一章注④) N.630. Cf. J.Bousquet [1964] *Inscriptions grecques concernant des Romains*, *BCH* 88, pp. 607-615, especially 607-609. この碑文は興味深いのは、顕彰理由としてエトノスや同盟国、互いのギリシア人への徳と好意によって顕彰されていることである。単数形のエトノスが、もしアカイア連邦全体を指すとしたら、連邦を一つのコイノンから一つのより大きなエトノスとする意識を読み取れるかもしれない。
- ⑮ Syl³ N.588, 118-21 (前一九六六年と推定) = Rizakis [1995] (第一章注④) N.697 (前二八五—二八二年と推定)。

- ①⁹⁷ *Syll.³ N.625.*
 ①⁷ W. Peek [1969] *Inscriptionen aus dem Asklepieion von Epidaurus*, Berlin, N.80.
 ①⁸ *IVO N.318.*
 ①⁹ Rizakis [2008] (第一章注④) N.173.
 ②⁰ Polyb. 2.52.2.55.17によれば、スパルタに占領されたポリスはカプエアイ、ペッレネ、フェネオス、アルゴス、フリウス、クレオナイ、エビダウロス、ヘルミオネ、トロイゼン、コリントス、メガレーポリスである。
 ②¹ マンティネイア (Polyb. 2.58.1-4; Plut. *Vit. Arat.* 39.1. *Vit. Cleom.* 14.1) アルトス (Polyb. 2.52.2; Plut. *Vit. Arat.* 39.4. *Vit. Cleom.* 17.4-5) コリントス (Polyb. 2.52.2-3; Plut. *Vit. Arat.* 40. *Vit. Cleom.* 19.1-2)。
 ②² ただし、第三章注⑫のオルコメノスの加盟決議碑文で「アカイア人のコイノン」の復元が正しいならば、クレオメネス戦争の危機以前に、他の「エトノス」の加盟に際して統合の意図をもっていたと思われる。
 ②³ 前四世紀半ば、コロネとの条約を記したとされる碑文 (Rizakis [2008] (第一章注④) N.120) は、欠損が大きいものの、連邦の中心であるアイギオンで発見されたため、アカイア連邦が設置した可能性が高い。だが、その中でコイノンは見られない一方、「アカイア人の評議会」(13) が記されている。また、同時期とされるアテナイとの同盟碑文では、「アカイア人」としか記されていない (Syll.³ N.181.11; 115.119.126.140)。少なくとも、碑文の建立主体である当時のアテナイ人はアカイア連邦をコイノンと認識していなかった。逆に、「アカイア人」とは明記されずとも、アカイア連邦を指す「コイノン」が用いられていた事例が、前三世紀とされるデュメの市民権付与に関する碑文 (Syll.³ N.531) でみられる。この事例に関しては、連邦再建後ま

もなく、他の「エトノス」が未加盟の時期だった可能性が高い。また、アカイアの「エトノス」に属するデュメが建立主体でもあるため、「アカイア人」をあまり強調する必要がなかったのかもしれない。

- ②⁴ ただし、前二世紀半ば、連邦外のオロポス人によって建立された顕彰碑文 (Syll.³ N.676) は、アカイア連邦の二種類の議会に言及しているにもかかわらず、コイノンは一度も現れない。そのため、「アカイア人のコイノン」という認識が完全に普及していたとは言えない。
 ②⁵ 従来の研究は、前三世紀末（長谷川によれば前二二六年）まではシユノドスに評議会と総会が招集されていたこと、改革によってシユンクレトスが導入されると、そこで和戦や同盟などの重要議題を審議する総会が招集されたことについては意見を同じくする。しかし、改革以降、シユノドスに評議会と総会のどちらが招集されたのかで議論となっていた。詳細は、長谷川岳男 [1994] 「アカイア連邦の政治組織——*συνεδος* と *συνκλητος*——」『西洋古典学研究』四二、七九、八九頁を参照。長谷川はそのような議論に対して、通説で重要議題を審議する総会が前提とされたシユンクレトスには、必ずしも総会が招集されているわけではなく、評議会も招集されていたこと、シユノドスにおいても総会と評議会が招集されていることを明らかにした。そこから、両者とも招集される議会は議題の内容に応じて異なっていたと考えたのである。この長谷川の解釈は、決して主流となっているわけではないが、説得力を持つものである。
 ②⁶ 合阪 [1986] (第二章注⑦) は、理念的な研究として、古典期には「デーモス（民会）」において、そしてヘレニズム・ローマ時代には「コイノン（総会）」において「全一性の理念」が一貫して作用していたと主張する。その観点から、アカイア連邦においては総会での「全一性の理念」が作用し、紐帯を形成する場として機能していたと指摘する。

②⑦ Livy. 38. 30. 1-5.

②⑧ 改革以前で招集場所が知られるシュンクレトスの事例は、地峡地域のシキエオン二例 (Pute. Vit. Arat. 40. 2. 41. 1; Livy. 32. 19. 5-23. 12)⁷、アルカディアのメガレオポリス一例 (Polyb. 4. 9. 1-5. ただし、実質的には軍会のようなものであった)、アルゴリスのアルゴス一例 (Livy. 31. 25. 2-10) の計四例である。

②⑨ Larsen [1965] (第一章注⑨) pp. 175-188 に「*ἐκ τῆς* Errington [1969]

(第一章注⑤) p. 139 も参照。

③⑩ 改革後で招集場所が知られるシュンクレトスの事例は、エリスが一例 (Livy. 38. 33. 3-5)⁷、アルゴリスのアルゴスが二例 (Polyb. 22. 10. 1-15; Livy. 42. 47. 7-8)⁷、アルカディアのクレイトルが一例 (Livy. 39. 35. 8-37. 21)⁷、地峡地域のシキエオンが二例 (Polyb. 23. 17. 5-18. 5. 28. 13)⁷、コリントスが一例 (CG VII 411 = *Syll³ N675*) の計七例である。

おわりに

新しいエトノス解釈に基づく分析から、アカイア連邦が公職制度において「エトノス」に配慮していたことが示された。しかし、それは同時に、アカイア連邦が複数の「エトノス」を一つの共同体に統合する必要性に迫られていたことを意味する。アカイア連邦は、対外的には「アカイア人のコイノン」の下で他の「エトノス」の統合を喧伝する一方、内部ではシュノドスの招集をアカイアの「エトノス」的色彩の強いアイギオンから解放することで他の「エトノス」への配慮を見せていた。公職制度の考察から推測された、特定のポリスによる橋渡し役も、そのような「エトノス」への配慮として位置づけられるべきだろう。ただし、そのような統合政策にも限界があった。特に、新たに加盟した「エトノス」から重要な公職者が就任する事例や、議会であるシュノドスやシュンクレトスがそこで招集された事例は少ない。抱え込む「エトノス」の増加によって配慮が不十分となったアカイア連邦は、ローマという外部の仲裁者の下でその一体性をなんとか保ち続けるが、最終的にはスパルタの脱退をめぐる問題がローマとのアカイア戦争に発展したことで、その命脈が尽きることになる。

本稿が用いた「エトノス」を単位とする見方は、アカイア連邦だけでなく、古代ギリシアの他の連邦の捉え方にも有効であろう。例えば、アカイア連邦が特定の「エトノス」を越えて他の「エトノス」を含みこみながら拡大したのに対し、

前四世紀に発展したボイオティア連邦では、あくまで特定の「エトノス」の中で連邦の統合を目指した^①。ここに、ヘレニズム時代のアカイア連邦の特質が立ち現れる。すなわち、アカイア連邦は「ポリスの連邦」と同等に、いやそれ以上に「エトノスの連邦」を目指していたのである。このことは、今まで「連邦」として一括りにされてきた共同体においても、「エトノス」の扱い方に大きな差異があったことを示す。今後は、連邦を「エトノス」の扱い方によって新たに整理し直す作業が必要とされるであろう。さらに、「エトノス」を単位とする見方は、連邦だけでなくポリスとの比較をもその射程に収める。たとえば、これまでの（そしてこれからも）研究の中心であるアテナイは、ポリスがアッティカという「エトノス」と重なる共同体として、古代ギリシア史の中で特徴づけられることになる。このアテナイという共同体は、先述したアカイア連邦やボイオティア連邦のような共同体とのどのような関係にあり、どのような歴史的立場づけを与えられるべきであろうか。今後、「エトノス」を単位とする観点から、古代ギリシアの共同体は新たに捉え直さねばならないだろう。

① 拙稿[2009]（はじめに注⑤）p.11-13の「普遍平和」条約をめぐる

るテーバイの立場を参照。

（京都大学大学院文学研究科博士後期課程）

The Official Organization and Integration Policies of the
Achaean Confederacy from the Perspective of *Ethnos*:
A New Perspective on Ancient Greek Communities

by

KISHIMOTO Kota

In ancient Greece, the polis was an important community but only one of several. There were various communities in ancient Greece in addition to the polis that we must also pay attention to in order to understand ancient Greece as a whole. Recently, many studies have been concerned with such communities. The federated Greek states are one of the most appropriate objects of study because they were formed out of many communities, for example the *poleis*, but also had a governing organization independent of the member communities.

Studies of the federated Greek states, however, are still being conducted from the viewpoint of polis. Because of this, some issues remain unexplained. One of them, which I consider, is how an official of the Achaean confederacy called the *nomographoi* was allotted to member *poleis*. Previous studies have regarded a district formed of *poleis*, the *synteleia*, as the only unit of the allotment. There has not been sufficient evidence to support this conclusion. To compensate for this lack of evidence, I analyzed the home *poleis* from which all of the officials, and not only the *nomographoi*, in the Achaean confederacy came. In the analysis, I discovered a tendency that almost all officials came from specific *poleis*. The cause of this bias cannot be explained from a viewpoint based on the polis alone.

In this article, I propose that *ethnos* is an effective perspective for solving this problem. Previously *ethnos* was regarded as referring to primitive tribes that existed prior to the appearance of the polis, but nowadays ethnological studies have reinterpreted the *ethnos* as referring to members of a community with common identities, for example ancestry, culture and history, etc. The distinguishing feature of this interpretation is that such identities were acquired and constructed. But, at the same time, it means that the communities were fluid and changeable according to circumstances. So, before at-

tempting an analysis based on the concept of *ethnos*, I must provide a definition of *ethnos* by determining the common elements that determine identity and then ascertain the existence of *ethnos* in the Achaean confederacy. In this article, I regard *ethnos* as a community based mainly on regional identity. Then, I observed that there were at least seven *ethne* in the Achaean confederacy, i.e., Arcadia, Achaea, Elis, Messenia, Lakedaimon, Argolid and Isthmus, and that the members of each *ethnos* tended to take concerted action.

Analyzing the problem of the allotment of all officials in the Achaean confederacy from the perspective of *ethnos*, I was able to demonstrate that they were allotted to specific *poleis* from each *ethnos*, for example Megalepolis in Arcadia, Sikyon in Isthmus, etc. It can be surmised that the allotment of officials in the Achaean confederacy was based on the *ethnos* as a unit. The Achaean confederacy was thus composed of not only *poleis* but also *ethne*.

Because the Achaean confederacy included many *ethne*, policies to integrate them into a single confederacy were necessary. In this article, I consider such policies through two approaches, the usage of the phrase *achaeen koinon* in inscriptions and the reform of the federal meeting. The words *achaeen koinon* were used mainly by the Achaean confederacy itself and the objects on which these inscriptions with these words are found were erected in areas where they would have been seen by many people. The usage of *achaeen koinon* in inscriptions, therefore, shows the policy of the Achaean confederacy to publicly proclaim to the outside world that the confederacy was the *koinon* (common property) of the Achaeans. On the other hand, reform of the federal meeting showed internal policy making. Philopoemen, the leader of the confederacy, changed the location of the *synodos* (regular meeting), which had been held only at Aigion, the political and religious centre of the Achaean *ethnos*. By this reform, the *synodos* came to be held in turn among member *poleis*. The reform was surely a policy aimed at members of *ethne* other than Achaea. It was due to the existence of *ethnos* that Achaean confederacy had to employ those two integration policies.

From the above, I have demonstrated that the confederacy took not only polis but also *ethnos* into consideration. That is to say, there was a multilayered structure where various communities coexisted and considered each other's interests. Hereafter, we should treat Greek communities as

being based on such a structure. The *ethnos* would be an especially effective perspective for other communities and not only the federated states. From this perspective, I think that the ancient Greek world will manifest an aspect unlike that previously seen.